

IS—審判の時—

蛇祖砂利

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

未知なる世界の知識を持つ事以外はごく普通の男子、檀正宗。IS適正試験に巻き込
まれた彼は偶然にもISを起動してしまい、IS学園へと入学する羽目に！

だがこうなつては仕方ない。我が社の商品に成り得るものを探すとしよう。

「――君の商品価値を示してくれ」

JUDGEMENT TIME！　示さなければ生き残れない！

目 次

ブルー・ティアーズ	1	ラウラ・ボーデヴィッツヒの消失	—
ラファール・リバイヴ・カスタムII 前半	12	主人公、織斑一夏の転機	—
ラファール・リバイヴ・カスタムII 中盤	21		
ラファール・リバイヴ・カスタムII 後半	30		
消費者、相川清香の場合	43		
ゲンム・コーポレーション／取るに足りない凡作	54		
主人公、織斑一夏の決心	71		
シユヴァルツエア・レーゲン	81		

ブルー・ティアーズ

格納庫、と呼ばれているそこは同時に発着場でもある。眼前のアリーナへと通じるゲートをレールを用いて射出され、戦場へと運ばれる。ここはそのための準備をする場である。

話をそらして自己紹介させてもらうと、私はどこかしらの世界の知識を持つた人間である。前世の記憶、とはまた違う。何故なら知識にある年号と今の年号にそう違いはないからだ。

仏教において、前世とは個人が生まれる前に送つた一生のことを言う。今的一生は現世といい、この一生の先が来世である。つまり私は現世の記憶を二つ持つていることになる。

幼い頃から持っていたから、それが何故私の中にあるのかは分からぬ。だが分からぬならそれでも構わない、友人が出来ない以外に困つたことなんてないし、むしろ私の趣味と嗜み合うことにより擬似的な才能として振るうことが出来るからだ。

「……仕方ない。檀、お前とオルコットの試合を先に回す。いいな?」

「問題ありません」

——私が戦場へと向かう兵士の一人であるからだ。

どうしてこうなつた。いや事の発端は何かなんて分かつてゐる、つい数週間前のことだからだ。私は、この世界を構成する重要なファクターとなり得てしまつた男子禁制であるISを、男の身でありながら起動してしまつた。そこからはあれよあれよと連れ込まれ流されて進められ、気がつけばクラス代表なんて物の候補になつてしまい、さらにはそれを決めるための戦いにまで巻き込まれてしまつた。

どうして、この学園の人間はこうも筋筋なのだろうか。物事には様々な解決法が存在するが、その中でも力による解決は最も愚鈍であると考へてゐる。

わからだまり、禍根、遺恨だけでなくストレスまで自分だけでなく他者にも残すからだ。まあ、一番嫌がる理由と言うのは……。

「私が勝つに決まっていますからね」

全く、無駄のない行動に勤めてほしい物だ。



その言葉は、あの時と全く同じ台詞だった。

あの時、俺とオルコットさんが啖呵を切りあつたクラス代表を決める時間。同じく他薦を受けていた檀は、千冬姉についてだからと勝手に決められ、いいなど念を押された時、瞳一つ揺らさずに力強い眼差しを持つて、確かに言つた。

『問題ありません。私が勝つに決まっていますからね』

その発言にクラス全体が唖然とした後、オルコットさんがまた噴火した。さつき言つた言葉をさらに酷くしたような、まさに侮辱のオンパレード。あまりの言いように俺だけで無くクラスメイトにまで火がつこうとしたその時に、静めたのは檀だつた。

『セシリア・オルコット。才能だけでなく最大限の努力を持つてイギリス代表候補生までのしあがつた本国で一時期時の人となつた悲劇の I.S.パイロット、その類い稀なる豊富で高めの適正率はまさに優秀の一言。一年全体で見ても間違いなく上位の実戦成績を持つ人物』

何処からかファイルを取りだし檀はそれをつらつらと読み上げる。その言葉にオルコットさんの態度は急変、自分の立場をよく分かつてゐるようですねと機嫌までよくなる始末。まさか媚を売るつもりなのか、ここまで生まれ故郷を馬鹿にされておきながら、と怒りの矛先があいつに向くのも束の間。

『——だが、どうやら過大評価が過ぎたらしい』

檀はまたも、クラスを静めた。その手に持つた紙媒体のファイルを、半分に破り捨て

たんだ。オルコットさんはまたも啞然、そうして少しすると顔を赤くするを通り越したのか目をつり上げ、殺氣というのかもしれない鋭い物を放ちながら、口を開こうとしたとき、檀が先んじた。

『しーつ。……これ以上は時間の無駄だ。織斑先生、授業の再開を』

鋭い物を向けられながらさらりと受け流し、なんでもないかのように授業の再開まで促す。千冬姉はため息をつくと、言われるまでもないとその場を纏め上げ授業を続けた。

クラスの皆はその姿に檀の評価をうなぎ登りにしたらしいけど、俺は全くそんなことは出来なかつた。むしろ俺の中で檀に対しても芽生えた感情は、恐れだつた。

具体的にどこが、と言わると自分でも掴み損ねているから言葉に出来ないのだけど、これだけはハツキリと言える。

檀 正宗は、必ず何かを起こす。



土を踏みしめる音が緊張に包まれ、静まり返つたアリーナによく響く。一步、また一步と彼女に近づく度に殺気が鋭く研ぎ澄まされて突き刺さるのを感じる。困ったもの

だ、今から行うのは試合であつて死合ではないのだが。そんなもの突き刺したところでなんの意味も価値もない。

ブルー・ティアーズ、君の行為も行く道も全て無駄ばかりだ。

「ここは I.S のためのアリーナですわよ。I.S も身につけず土足で上がり込んでくるなんて、分を弁えた方が宜しいのでは？」

「許可はある。それに、私の物は君のと違つてスマートでね、ゲートを使わずともアリーナに上がるのだよ。体重 100 kg 越えの君には分からぬかも知れないがね。ブルー・ティアーズ」

「……どうやら、最後の許しのチャンスも棒に振るつもりのようですね」

「そう言う君は記憶力が乏しいようだね。私は言つたはずだ。『私が勝つに決まつている』、とね」

「ツ！」

瞬間、光が迸る。耳のすぐ側を光線が走り、背後の地面に轟音と傷跡を残す。

なるほど、これがスター・ライト m.k.III の威力か。現代兵器が太刀打出来ないと言うのも頷ける。こんなものが相手では、戦車と言えど十秒も持たずに撃破されることだろう。何千発ものミサイルを I.S 一つで凌ぎきつたという話も、眉唾物ではないらしい。「I.S を装着なさい、私が貴方を撃ち殺さない内に」

「ではお言葉に甘えさせてもらうとしよう」

まだ長袖である制服を一枚脱ぎ、物を取り出してから地面に放り捨てる。そのままメタリックブルーに塗装されたそれをバツクルに重ねるように当てはめると、重苦しく渋い音声で装着音が鳴り響く。

そうしてポケットから、我が社の研究成果を取りだし、取り付けられたスイッチを押した。

『K A M E N R I D E R C H R O N I C L E』

「今こそ審判の時」

研究成果、ガシヤットを勿体ぶらず手放す。ガシヤットは重力に従いあわや地面へ真つ逆さまと思ひきや、その場で落下を止め浮遊し、まるで意思を持つかのように私の回りをくるりと回り始める。

それを確認した後にバグルドライバーIIのAボタンをクリックすると、軽快な音楽がアリーナ全体へと流れ始める。別に何かを馬鹿にしているわけでもこけにしているわけでもない、これは待機音声だ。審判の時を始めるための、Aメロなのだ。

ガシヤットの挿入音が重苦しい音声として流れる

「——変身」

解放のスイッチを押した。

『BUGL UP!』

それは、自身を昇華させる言葉。

『天を掴めライダー、刻めクロニクル。今こそ時は、極まれり!』

激しい逆りと共に、私の全てが変わったことに今や自分でなくアリーナにいる全員が気づいたことだろう。黒を基調とした緑のフルボディ、はためく黒であり赤でもあるマント。そして今の自身を象徴する、浮かび上がった時計と数字のマーク達。

「全身装^{フル・スキ}甲の I S …!」

「そのような武骨な名称は止してもらおうか。これの名……いや、今の私は”クロノス”。”仮面ライダー クロノス”と、そう呼んでもらおうか」「ふざけた事を……檀正宗ツ!」

勢いのまま叫ぶと、彼女はブルー・ティアーズに装備された現行で数少ない武装である、ビット”ブルー・ティアーズ”を自身の側に侍らせた。

また一つ、無駄を増やした。もう既に試合開始のブザーは鳴っているというのに、早々に撃ち抜きに行かず余裕まで見せてている。宙に浮かんでいるからと言つて、その程度のことでも慢心してしまうとは、つくづく自分の目が鈍くなつたのかと思つてしまふ。「さあ、私、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる——」「し——」

決めようとしているところ悪いが、これ以上無駄を増やされては困るのだよ。時間まで無駄にされてしまつてはたまらない。

それに、

「審判の時は、厳肅でなくてはならない」

「……あなたという人間は、どこまで人をこけにすれば――！」

『PAUSE』

AとBボタンを押すだけ。

それだけで、世界は嘘のように静止する。

風も、音も、ブルー・ティアーズでさえも。

範囲内における私以外の全ては呼吸すら忘れたかと思えるほど静まり返る。

そうだ、こうでなくてはならない。

彼女には悪いが、私が行おうとしているのは試合ではなく、ジャッジ審判なのだから。

「ブルー・ティアーズ、君の人生は実にドラマ的だ。

両親を失い、幼い君は勤勉の後残った財産を外敵から守り、信用できるのは同じく残されたメイドの一人だけ。素質はあつただろうがそれを腐らせることがなく、努力で磨き続け、国を代表する候補生にまで成り上がつた。

まさにどん底からの逆転劇だ、君のような存在をゲームに――商品にできれば、

どれ程の売り上げが出ただろうか。私には想像もつかないよ」

だが、それはもう叶わない。それら輝く全てを、彼女の持つ下らない固定観念が、女尊男卑が鋸び付かせてしまった。こうなつては再び磨いたところで鋸びつく前より売り上げの延び代は半分ほどに落ちてしまつてはいるのは明確だ。

「ブルー・ティアーズ、いやセシリア・オルコット。君にはもはや商品価値はない」

この身は既にIS以上のスペックを持つてはいる、その程度の高さなど軽く跳躍する程度で届いてしまう程に。慢心は己を殺すとは、よく言つたものだ。

跳躍し彼女まで約半分、Bボタンをクリックする。所謂、キメ技というものの体勢に入る。この程度で今までの無駄を取り返せる訳ではないが、手間は少ない方がいい。ただの一撃で、仕留めてやろう。

そうしてすぐに彼女の目の前まで到達し、再度Bボタンを押す。

『CRITICAL CREWS—AID』

「たっぷりと味わうといい」

もはや聞こえてはいないだろう彼女にそう囁き、その場で力付くに反時計に回転、振り上げた蹴りを、彼女の眉間に叩き込む。

響かない鈍い音の後、彼女はあまりの威力に姿勢を崩したが、やはり再び動かなくななる。

当然だ、私がしているのはただのフリーズではなく、文字通り時間泥棒なのだから。
そこそこ跳躍したとは言え、飛べるのだから何事もなく着地出来るのは当たり前だつ
た。

『終焉の一撃!』

「ブルー・ティアーズは絶版だ」

『RESTART』

AとBボタンを再び押す。

たつたそれだけの行動で、世界は呼吸を思い出す。

次いで聞こえたのは鈍い音の続きと、壁を碎いた轟音。

我ながら見事な蹴りの入れ方だつた。あそこまで綺麗に入れられてはいくらISと言えど一発で再起不能になつているだろう。

アリーナに設置されたモニターを見上げれば、予想通りにシールドエネルギーは0になつており、彼女の敗北を雄弁に示していた。

『GAMEOVERだ』

『…………しよ、勝者、檀正宗』

ブルー・ティアーズのデータを得られなかつたのは惜しいが、使い手があれでは分
かっている以上のデータは望めないだろう。セシリア・オルコット、君は本当に惜しい

タイムビルク

人材だつたよ。

ガシャツトをドライバーから引き抜き、私へと姿を戻した後、そのまま悠々とアリーナから立ち去つた。

一方的とは言え、勝利の余韻は変わらず良いものだと、実感するために。

ラファール・リバイヴ・カスタムII 前半

そもそも私はこのI.S学園に何を求めているのか。確かに流れであれよあれよと連れ込まれたにせよ、私は通学を拒否できるそれなりの理由と肩書きを持つている。つまり、行きたくないと思えばいつでもそれを使つて在学だけしている形に持ち込めたのだ。

だが私がそれをしないのは、この学園の面白いところに気がついたからだ。真つ二つだ、この学園は二つにしか分けることができない。それは消費者であるか、貢献者であるか。

消費者というものは会社経営で無くてはならないものである。そもそも会社は何かしらの物を消費者に売り付けて存在しているのだ、買うものがいなければ成り立たない。この学園の二つのうち一つは皆消費者として扱うことが出来る、我が社の大重要な顧客として。

貢献者とは、即ち我が社に利益を与えてくれるものである。商品はもちろんんだが、会社経営は一人で成り立つものではない。我がゲンムコーヒー・レーションもまた私一人で動いているのではなく、私もあくまで社長として出来ることはしているがどれも一流と

は言いがたいだろう。

ならば、その道の一流を雇用すればいい。そしてその一流を囲むようにその道の筋の者たちも雇用し、塊として会社を形成する。即ち貢献者とは我がゲンムコーポレーションの社員一人一人のこととも言うのだ。

だがゲンムコーポレーションはまだ上を目指している、上へ更に上へと。その為には更なる人材が必要だ。一つ一つ、積み上げることで着実に押し上げてくれるような人材が。

商品価値とは、商品になるものと貢献者になるもの、二つのことを意味しているのだ。

「そういう意味では、君の商品価値は最高峰かもしれないな」

夜の帳も落ちた頃、学園寮の一室でそう囁く。

「少し前に来た甲龍は商品価値があるにはあつたが、今すぐ我が社の益になるようなものではなかつた。彼女のストーリーはありふれているし生々しい、商品としては絶版ものだ。だがあれは、ヒーローの側にあつてそれの価値を高める、謂わばヒロインの役割、貢献者なのだよ。行き着く先が良いにしろ悪いにしろ」

二組のクラス代表、と言つていたか。ああ、結構だとも。我がクラス代表の白式と存分に高め合うといい。そうして商品価値が規定まで高まつた頃には……いや、憶測で物を話すのは社長として良くないことだ。まだ互いに潰れ合うかもしれない、そうなつた

場合は両者共々絶版ではあるが。

「当然だが、シユヴァルツエア・レーゲンにも商品価値はある。だがあれは貢献者にはなり得ない、あそこまで喜劇向きな人材もそういない。商品としては我が社がプロデュースすれば莫大な売り上げになるだろう」

だがそう、ここまでおまけのようなんだ。

「ラファール・リヴィアイヴ・カスタムII。先程も言つたが君は素晴らしい商品価値を持っている。ストーリーはありふれたようなものでなく劇的で、その空気を読む能力は他の存在の一線を越えている。実に我が社好みの人物だ」

「……関係ないよ、僕は明日にはもうこの学園にいないんだから」

女である自らの体を抱きしめながら、絶望したように彼女はそう言つた。

素晴らしい、彼女は何もせぜども自分を底へ底へと叩き込んでくれる。存在してはいけないのだと、存在してはいけなかつたのだと。自分が思う限りどこまで深くなるそこへと身を庇うことなく投げ出している。

だが世の中には捨てる神あれば拾う神もある

「そう自棄になることもないだろう、ラファール・リヴィアイヴ・カスタムII。確かに君はシャルル・デュノアとして生きる道は絶たれてしまつた、もうデュノア社には帰れない。ああ、母親の元には帰れるかもしねないな」

かき抱く腕に爪が更に深く食いつく、唇は噛まれ食いちぎるのではと思うほど力を強く込めていた。

「だが私ならば、ゲンムコーヒー・ボレーシヨンならば、君を救うことが出来る」

その一言で、全ての力が抜けるわけではなかつたが傷がついてしまうような事態は避けられたようだつた。彼女は戸惑いがちにこちらを見るが、すぐに俯いてしまう。

「……価値が無くなれば、僕をああするんでしょ？ セシリア・オルコットさんのように」

セシリア・オルコット？

ふむ。

さて、誰だつたか。私はそんな人物といつ関わりを持つたんだ？

会社でも学校でも多くの人物と顔を合わせてゐるから、流石に一人一人の名前までは覚えていない。先日我が社に入社した社員だつたか、はたまた三組の生徒だつたか。心当たりが思つたほどないな、絶版にした何かであれば可能性はあるのだが、捨てたゴミの名前まで覚えてはいない。

だが彼女の口ぶりから、クロノスの恐ろしさは知つてゐるようだ。恐らくだが、絶版にしたうちの一人なのだろう。あとで過去の資料を確認するとしよう。

「先程も言つたが、君の商品価値は素晴らしいものだ。そしてそれが損ねられることは、

一生あり得ない。何故なら私は——君を右腕として雇いたいからだ』



最初に彼を見たとき、僕は恐れを抱くと同時に寂しさを覚えた。

転入してきて最初の授業が始まつた頃、皆それぞれのグループで固まつて談笑をしていた。授業が始まるまでまだ余裕はあるだろうし、それも当然だなと思つてた。でもふと見渡すと、誰も近づいていない場所があることに気がついた。

そこに彼が、一人で立つていた。

檀正宗。一組クラス代表決定戦でイギリス代表候補生を文字通り一瞬で倒し、そして彼女からI-Sすらも奪つた男。そして、僕が監視しデータを盗む対象の一人でもある。何故彼が孤立しているのか、おおよその検討はついていた。彼は強すぎたのだ、そして情けも容赦も持ち合はせてはいなかつた。恐れられているのだ、所属クラスだけでなく、学年全体でも。二組の子も、彼には近づこうとしなかつた。

恐らく皆、彼のことによく思つていらないのだろう。だけどそれを表に出して喧嘩を売ることもできない、そうした場合どうなるかは、セシリア・オルコットが自らの身を持つて示してくれたのだから。

情報によると彼女は I S 学園を除名後候補生から外され、さらに本国からは多額の賠償金を支払わされたと聞く。彼女は今、守ってきた財産すら失い、一日をなんとか食いつないで生きているらしい。

だが彼女は謂わば被害者なのだ、規定通りの勝負であればあなることはなかつた。だから、咎められるべきは彼であるし、除名されるべきも彼であるはずだ。

しかし彼はそのどちらも負つてはいない。それは彼が、いやゲンムコーポレーションが日本製の I S 部品のシェアを全て掌握しているからだ。どんな町工場でも、どんな大企業であろうとも、全て買収に成功している。今やゲンムコーポレーションは、日本一の I S 企業だ。

元を辿れば、彼女のブルー・ティアーズの 80% はゲンムコーポレーション製の部品で出来ている。フレームやシステムはイギリスに本店を置く企業のものであるけど、組み立てるべき部品がなければ I S は成り立たない。

もちろん部品なんて日本製である必要はない、中国なりインドなりドイツなり、どこでなりとも買えばいい。むしろ自国で生産すればいい。しかしそんなものはおもちゃだと言わんばかりに、日本の技術力の高さをゲンムコーポレーションが雄弁に語っている。

そもそもゲンムコーポレーションはゲーム会社だ。そのゲームの評価の高さは他の

ゲーム会社を全て過去のものにするほどに高い。全世界で遊ばれていない時間はない今まで言われる原点にして頂点のゲーム、”マイティアクションX”がそれを物語つている。

シンプルながら完成されつくされているそのあまりの面白さは、販売されればどの国でもゲーム名で社会現象になるぐらいだ。しかも未だにDLCを更新しているし、遊び方を増やすModも、どれもこれも無料で全て公布している。払った値段以上の満足と楽しさを与える、それがゲンムコーポレーションの理念らしい。

かく言う僕も熱狂的なマイティアクションXのファンの一人だ。二人プレイが実装された時は、お母さんと一緒に夢中になつて遊んだなあ。

閑話休題。

つまりゲンムコーポレーションは、世界の企業とは隔絶された技術力とセンスを誇っているということだ。部品を使われたISはスペック以上の動きをし、故障はなく、メンテナンスも五分ほど弄ればすぐに終わる。例えそのISで事故が起こったとしても、原因はパイロットにあると誰もが即答する。

それほどまでにゲンムコーポレーション製というのは信頼されているのだ。ゲンムコーポレーションも信頼に応えるように定価より安く部品やパーツを提供しているし、まさにIS世界を牛耳る存在として頂点に君臨していると言つても過言ではない。

そんなのを相手に、敵に回したらどうなるのか。IS部品の輸入だけでなく、ゲームの輸入までストップされ、ゲンムコーコーポレーションのゲームなんて誰も手放そうとしないからネットでは転売屋が定価の倍以上の値段で売り、足元を見てさらに値段を吊り上げることだろう。

ゲンムコーコーポレーションのゲームは麻薬だ、配給がストップされたとなれば市民、いやイギリスに住む9割の人間がストライキを起こす。

ISもろくな物を作ることが出来なくなるため国力も下がる、イギリスは混迷期に入り、最終的にはイギリスという国が無くなることになるかも知れない。ゲンムコーコーポレーションとは、それほどの力を持つている。だからセシリア・オルコットを切り捨てるのは、当然の帰結だったのだろう。

しばらくすると、授業が始まつた。専用機を持っていない学生にとつて初めてISについての操縦技能の教えを乞うことが出来る場であることもあって、授業はそれなりの盛り上がりを見せた。

順番にクラスメイトに操縦を教えていると、ふと彼が誰もいない場所で何かしらの作業をしていることに気がついた。授業中でそういうことをしているのに、先生は誰一人彼に対しても怒るような様子は見せない。

『……ああ、あれ気持ち悪いよね。どの授業でもあんな感じだよ、一人で隅つこの方で

黙つてキーボードカタカタしてさ。何しに来てるんだろうね。ぶつちやけ邪魔だしい
らないから帰ればいいのに……』

『ちょっと、聞こえるよ』

彼。
質問してみると、彼女たちはそういう風に答えてくれた。
ISを動かしてしまったからこの場にいるのに、一夏と違つて誰にも必要とされない

まるでどこかの誰かを見ているようで、胸が苦しくなつた。

ラファール・リバイヴ・カスタムII 中盤

気がつけば、一夏の特訓に参加することになっていた。一夏は檀くんの辞退によりクラス代表になつたため、その実力はまだまだ基準に達しているものではないらしい。本人も今の実力に満足していないようだし、特訓すればするほど効果が出るかもしれない。それを側で見れることは、僕としても大変都合の良いことだ。

僕の目的は白式のデータの収集にある。特訓に参加できる位置というのは、最もデータ収集に都合の良いポジションだ。

檀くん、クロノスのデータも取れると尚良いということを言われたけれど、当の本人はあの一戦以来アリーナに来ることもなく、ISを使う授業にも参加せずに黙々と何かしらの作業に没頭している。一度話しかけては見たものの、煙に巻かれてしまった。彼のデータ収集は後々ということになるだろう。

さて時は過ぎて放課後となり、一夏の特訓の時間となつた。彼の武装は情報にあつた雪片式型以外は存在していない、というよりも拡張領域が全てこの雪片式型に持つていてしまっているらしい。そのため僕の武器の使用認証などをして色々と武器を試し撃ちさせていた頃に、彼が来たのだ。

既に I.S を身にまとい、悠然とした歩みでアリーナ中心へと向かってくる檀正宗が。
『……檀、なんでここにいるんだよ』

『私は変わった専用機持ちではあるが I.S パイロットの一人、そのパイロットが練習のためアリーナに立ち寄るのは何もおかしいことではないと思うのだがね』

珍しく嫌悪を表情に出し噛みつく一夏に、檀くんはいつも通り変わらず余裕を持つて答えた。フェイスの向こうの表情で彼が笑っているように感じられたのは、きっと僕だけではないはずだ。

『また誰かに手を出そうとしてるんじゃないだろうな』

『私が今まで誰かを自発的に傷つけようとしたことはなかつたはずだが……。どうやら君は礼儀だけでなく記憶力まで欠けているらしいな白式』

その言葉に血が昇つたのは一夏、ではなく彼を想っている凰さんようだつた。その肩に装備されている非固定浮遊部位の刺付き装甲を一部スライドさせて、砲門を向けると、獰猛な笑みを浮かべ口を開いた。

『自分のした行いも思い出せないなんて、そつちこそ脳ミソちゃんと機能してるの？

そんなにカツチカチじやあ脳ミソが泣いてるわよ』

『筆記テスト基準値ギリギリの君に言われると、いやはやなんとも堪えるものだ。私以上に使われていない大脑を思うと、思わず涙を流してしまってほどだ』

皮肉に皮肉をもつてすっぱりと返す。皮肉の言い合いというのは頭に来た方が負けだと言うけれど、隣の彼女の笑みが更に深まつたのを見て本当にそうなんだな、と思つたのを覚えている。短い付き合いではあるがその中で思つた感想通り、彼女は口よりも先に手が出るタイプ人間であるらしい。

『のまま見過ごすことは出来ない。』

『まあまあ。檀くんは練習をしに来ただけだよ？ それなら僕たちが関わる必要なんて何もないさ、檀くんだって理由もなく手を上げるようなことはしないだろうしね。そういうだろう、檀くん』

『君の言う通りだラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ。理由もなしに、私は誰かに手を出すような真似はしない。今この場で宣誓したつていいが、如何かな？』

『……いい、そんなの必要ない』

吐き捨てるような一夏の言葉に、彼は特に何かを思うことはなかつたのかそのままアリーナの端の方へ移動し、軽く一人で型を確かめるように動き始めた。

これは、チャンスだ。勘だけど、これ以降檀くんがアリーナを使つて練習する場面に遭遇することはきつとないだろう。だから僕の役目を、データ収集を行うのならば、今が最大の機会だ。一人で動くよりも、相手と組手をした方が練習効率も良い。見てきた限り彼は効率の良い方を好む、檀くんはきつと僕の申し出を断らないだろう。

『……なあシャルル、檀と話をするならきつと今だと思うぞ。前々から仲良くしたいとは言つてただろ？俺のことは気にするなよ、筹だつて鈴だつているからさ』

考えまで同じかどうかはわからないが、一夏も今が機会だと分かつてているのだろう。こうやつて背中を押してくれたのだから、僕は応えるべきではないではないだろうか？いやダメだ。

最大の機会、最高のチャンス、最上の舞台。今を逃す手はない、だがそれでもダメだ。これに乗つてはいけない。

あまりにも出来すぎている。

もし、どうする？

もし彼が僕のことを疑つていたら、もし彼が僕をスペイだと感じ取つていたら、そんな中この場で僕が彼に近づいたら、どうなる？

先の会話で分かつた、彼は非常に賢い。同時に理性的で、何に対する準備も出来ているようだつた。

あの時、凰さんに砲門を向けられていた時、彼はいつでも動けるように戦いの準備を終えていた。彼は獲物を囮みいつでも終わりの手を出せるように、そうまるで蛇のように鋭く早く確実に、その時が来れば凰さんを襲つただろう。

今だつてそうだ、僕はもう既に罠の一歩手前まで来てしまつていて。あと少しでも進

んでしまえば、きっと僕は終わりを迎えてしまうだろう。

『大丈夫、同じクラスメイトなんだからいつだって話す機会はあるよ。今は、友達の約束ちゃんと果たさないとね』

まだその時ではない。罠を目の前に、僕は後ずさり避けて道を進むことにした。そうだ、焦ることなんて何もないんだ。道は罠を貼られた一本道だけじゃない、視界を広く持てば道は無数に広がっていると言うことがわかる。

その内いくつかの道は既に閉ざされてしまっているが、それでも通れる道はまだ残つている。なら、後はそれらから最善を選んで進むだけでいい。

さて変わらず練習を続ける僕たちに、また新しい乱入者が入ってきた。

ドイツの専用機、”シュヴァルツエア・レーゲン”を身にまとったラウラ・ボーデヴィッヒさんだ。彼女は何やら一夏に対して浅からぬ恨みを抱いているようだった。何故かはわからない、ただ頻繁に織斑先生のことを引き合いに出すだけで、何かを語ろうとはしない。とにかく一夏と戦い勝利したいだけのようだ。

それに対して一夏はもちろん否定した、一般人は理由もなく手を上げるような真似はしない。

『そうか、では戦わざるを得ないようにしてやろう』

その一言の後に彼女の肩の砲門が火を噴いた。狙いは一夏ではないのを見て威嚇射

撃かと思つて氣を抜いたが、それがダメだつた。

弾道には、練習を応援していただだの女子生徒が立つていたんだ。

『——ツ！』

僕の出力では、恐らく間に合わない。だが一夏ならば、一夏の瞬間加速ならば間違いなく間に合う。一夏の顔が怒りに歪むのが見えた。

すぐに射出体勢に入り、エネルギーの充填を始める。

女子生徒がこちらへ射撃されたことに気づき、顔をくしやりと歪めた。

一秒もからぬ内に充填が終わるであろう、そんな時に、彼が動いた。

結果的に、弾道は逸らされた。弾はアリーナのシールドに当たり弾かれ、地面へと転がる。

一夏はまだ、射出されてはいなかつた。膝をついた彼女の命を救つたのは、檀正宗だつた。

『……なんの真似だ、檀正宗』

予想外の邪魔立てに、彼女の目が鋭くつり上がる。

『——何の真似、か』

彼はいつもと変わらぬように、悠々と語り始めた。

『それはこちらの台詞だよ、シュヴァルツェア・レーゲン。何故彼女を絶版にするような

真似をした』

『あの程度、織斑一夏でも止められていた、確實にだ。私は方に一つでもそいつを殺すような、手の抜き方を間違えるようなことはしない。』

貴様こそどういうつもりだ、何故邪魔をする。これは私と織斑一夏の問題だ、貴様には何の関係もない。その行為にはなんの意味もない』

自分から周りを巻き込んでおいて、そんな台詞が通ると思つてているのだろうか。いや、恐らく本当に思つてはいるんだろうなあ、ドイツ人は頭の中までホットみたいだ。どうやら彼もそう思つていたらしく大袈裟に呆れた表現をしていた。

『前半についてはもはやどうしようも、救いようもないようだ。さて君はこの行為に意味があるのかどうか、と気になつてはいるようだ。あるとも、それも君よりも随分とまどもな理由がね』

彼は一步二歩と歩き始めると、言葉を続けた。

『彼女は我が社の大事な顧客だ。ファンの一人でも減ることがあれば、売り上げに大きな支障が出る。それが止められると言うのならば、止めるのが会社の義務と言うものだ』

『何を言つてはいる、お前は一体なんだと言うのだ』

ボーデヴィッヒさんは彼が何者か、まるで聞かされていないようだつた。恐らく、自

分から説明の機会を蹴ったんだろうなあと思う。彼女の標的は最初から織斑一夏、ただ一人だつたみたいだ。

『私が何者か、どうやら君は何も聞かされていないようだね。所でシユヴァルツエア・レーゲン、君はゲンム・コーポレーションという企業を知つているかな?』

『……まさか、貴様』

『ようやく気づくとは、分かつてはいたが君は驚くほど貢献者としての商品価値がないようだ。そうだ、ゲンム・コーポレーションを作つたのは私、この檀正宗こそが社長だ』
ゲンム・コーポレーション、一般人であれば誰もが知つてゐるゲーム会社、IS関係者であれば知らぬものはいない大手IS企業。二つの顔をあわせ持つそれを巧みに運営している社長が、目の前の彼であると知つたときの彼女の顔は、それはもう鳩に豆鉄砲を食らわせたものよりも驚いた表情をしていた。

『我が社の顧客に手を出すということは、ゲンム・コーポレーションに牙を向けたことに他ならない。当人同士の問題であるならまだしも、全く無関係な我が社のファンを傷つけようとした罪は、あまりにも重い』

一步、また一步と距離を縮め、ついに二人の距離は互いの間合いに入った。

『審判の時だ、シユヴァルツエア・レーゲン』

彼の手がドライバーに伸びようとした、その時だつた。

『そこの生徒、何をしている！　名前と所属を言え！』

アリーナ上部にある放送室からの忠告に彼は手を止め、

『……時間か。今回のこととはまたの機会にするとしよう』

そう言つて構えを解き、彼女に背を向け歩き出す。ボーデヴィイツヒさんもまたこれ以上この場にいる気はないのか、彼とは逆方向へその場を去つた。

一触即発の空氣から解き放たれて、思わずほつとため息をついて、驚いた。

僕の肩に、檀くんの手が置かれていたからだ。

『ラファール・リヴィアイヴ・カスタムⅡ。君には前々から興味を持つていたのだが、今回のことでの然興味が湧いた、後で私の部屋に来てくれ。一度茶も交えて話し合いたい』

それだけ言うと彼は離れていき、腰の抜けていた同級生に手を伸ばし、抱きつかれ泣かれていた。いや、あれは安堵から来たもので、泣かした訳ではなさそうだ。

そんな彼女に紳士的に接する姿を見て、僕は一人言葉の意味を掴みかねていた。

ラファール・リバイヴ・カスタムII 後半

あの時の僕は、あの言葉に對して疑いを持つていた。当然だ、受けとる直前であんな罠を張られてしまつてはそのまま鵜呑みにしろという方が無理があると思う。何があつてもいいように、とナイフやら銃やらを隠し持ち、何があつてもISの装着前に攻撃をし自分の身はなんとしてでも守つて見せる、と意気込んでいた。

まさか、思いもしなかつた。このお茶会が、そんな。

『なるほど、そういう観点もあるのか。いや、君の意見は實にためになる』

『僕みたいな一ファンの感想が役に立つたのならこれ以上に嬉しいことはないよ』

——本当にただお茶を飲んで会話するだけだなんて……！

いや、いやまだだ。まだ警戒を解いてはいけない。これはまだ前座だ、所謂奉制しあうべき場。こんなところで挫けてはいけない、どんな罠があつても負けたりなんかしない！

『さてシャルルくん、君の意見には本当に助かつたよ。その仕事に見合つた報酬として”マイティアクションX”の新作、の試作品を是非プレイしてもらいたいのだが、どうだろう？』

『是非お願ひしますツ！』

ゲンム・コーポレーション製のゲームには、勝てなかつたよ。

いやだつて、しようがないよ。こんなのは誰だつて頷いちゃうし引つ掛かつちやうよ！
だつてあの不朽の名作、世界で最も遊ばれたゲームのギネス記録を塗り替えたマイ
ティアクションXの新作だよ！ こんなの頷かないなんて、それこそファンとして失礼
というべきじやないかな！

『くくっ……ああ、いや失礼。君の熱意が、製作者の一人としてあんまりにも嬉しくて
ね。つい』

『い、いやあ……あはは……』

そこで、僕が思わず身を乗り出して彼に顔を近すぎるほど寄せていることに気がついた。嬉しかつたとは言え、勢いに任せて僕はなんてことをしているんだ。正宗の態度が思つたよりフランクだつたのもあるかも知れないが、いくらなんでも心を許しすぎている気がする。

いけないいけない、自制自制。僕がこの場にいるのはスペイとしてなんだから。

とりあえず落ち着くために、紅茶を一口。

『——美味しい』

色々と紅茶を飲んできたつもりだつたけど、ここまで美味しいのに巡りあつたのは初

めてだ。僕の反応を見ると、正宗は自慢する子供のような表情で語り始める。

『ああ、それは私のお気に入りでね。我が社でブレンドしたものなんだ』

『ゲンム・コーヒー・ショーンって思つたより手広いんだね……いくらぐらいするの?』

『数千万』

『嘘つ!?』

そ、そんなことを知つてしまつては勿体無くて飲めなくなつてきちゃつた……！　どうしよう、舌が肥えてしまつたら紅茶が飲めなくなつてしまふ。ああでも美味しいからもう少しのみたい……！　どうしようこの二律背反！

『ジョークさ』

『ジョーク!?』

正宗はくつくつと笑いながら、ゲームの準備をしてこよう、と言つて自身の机の方に向かつていつた。

そ、そうだ、からかわれたのは恥ずかしいけれど、この後には新作ゲームが待つてゐるんだつた。βプレイヤーとしてプレイできるんだからこれぐらい我慢我慢。

…………それにもかかわらず、まだかな。いやいや、試作品と言つていたし、完成していないそれを準備するのにきっと色々と手間がかかっているのだろう。それに、彼は社長だが独善的な王様ではない。だから何をされても許されるわけではないのだ、会社か

らのお許しを待つ必要もあるかもしない。

…………まだかな。いやダメだダメだ。きちんと自制しないと。

そこでふと、床に一枚のコピー用紙が落ちていることに気づいた。何かの資料かもしないのに、こんな雑な管理方法でいいのだろうか。いや、正宗も案外人間だつたりして。とりあえず本人に渡そう、とそんな軽い気持ちで手に取つたのが、間違いだつた。

『…………。んんっ…………!?』

こ、この紙…………これからゲンム・コープレーションのゲーム開発の予定表だ!?
 う、うわあ…………すごい、そうか、マイティアクションXの次のDLCはそれぐらいに配信されるんだ……。楽しみだなあ……。ああっ!? た、タドルクエストがリメイクされるつて噂、本当だつたの!? うわあ、どうしよう、お小遣い足りるかな……中古を待つのも手だけど、手放す人なんているわけないよね……うーん、正宗になんとか融通出来ないかつて聞いてみようかな……ダメだ、頷く姿が想像できない。うう、バイト探そう……。ど、ドラゴナイトハンター乙つてなに? もしかして完全新作!? う、うー!
 どうしてこう欲しいものつて被るのさあ!

『百面相をして、随分と楽しそうじやないか』

『ひやわあ!?』

驚いて振り向くと、正宗が苦笑いを浮かべて立つていた。もしかして、全部見られて

た？　こ、これは……相當、恥ずかしい……！　と、そこまで考えて頬に帶びた熱がさつと引いていく。

これ、もしかしなくても機密文書なのでは……？　そ、そうだとしたら、僕は取り返しのつかないことをしてしまったんじやないだろうか。

『あ、あのっ、これっ、見ちゃったんだけど……』

『ん、ああ、どこに行つたかと思つたらこんな近くにあつたのか。いや助かつたよ、ありがとうシャルルくん』

『……せ、責めたりしないの？』

『リーケさえしなければ、私は君に何かしたりなどしない。この情報は君の胸に、そつとしまつておいてくれ』

それよりも準備ができた、と彼は手を引いてテレビの前まで連れていくてくれる。
もしかして、これが彼の素なのだろうか、となにとなしに思う。

そうだ、考えてみれば当たり前なのだ。

彼は世界に誇る大企業、ゲンム・コーポレーションのCEOなのだ。ただの学生だけが集まる場所ならばまだしも、IS学園は良くも悪くも国の手が入り込んでいる。僕のよう¹にデータ収集のためにスペイをするような人間だつているのだから、どんな人間がどこから自身に干渉してきてどのような影響を会社に与えるかなど分からぬ。もし

あの素つ気ない態度と冷血にも思える企業主義が会社を守るための方法だとしたら、どれだけの人が見方を変えるのだろう。

少なくとも、僕は変わった。確かにオルコットさんの件は恐怖すべきことだ、けれど彼女にだって悪いところはあつた。クラスメイトに色々と聞いてみると、最後には正直スッキリしたとも言つていたし、やり過ぎは否めないが彼が全部悪いと思うのは間違いだと思う。

それに、こんなにも柔らかく笑うことが出来る人間を、僕は悪だとは断定したくなかった。

新作、“マイティブラザーズXX”は試作品であるというのにも関わらず素晴らしい出来だつた。前作であるマイティアクションXでの評価点を最大に活かし、尚且つそれは今回からの新要素、別々の能力を持つた二人マイティを操るというものだが、それらを評価点で潰していい恐るべきバランスの元に成り立つていてるゲームだつた。まだ1ステージしか出ていないといいうのが残念でならないけど、逆に言えば1ステージだけでも十分ゲームをしたという満足感を得ることが出来るまさに名作になるであろうゲーム。

けれど不満点がないわけではない。試作品であるから仕方がないかもしれないが、新要素に対するSEが前作の応用、所謂使い回しされているものであるといいう点。そして

新要素のせいでスピード感が損なわれているという点だ。

マイティアクションXはギミックがあつても本来のスピード感を損なわせないもので、無駄に足止めをされたりして不愉快にならずに勢いのまま進めるゲーム。その点がマイティブラザーズXXの交代システムやギミックで少し損なわれているのが残念だつた、という由を正宗に伝えてみると彼は真摯に受け止めてそれらを改善することを約束してくれた。

『君ほどのファンの言葉だ、一攫千金よりも価値があるのは間違いないだろうからね。それに、美人の言葉はまず信じろ、と祖父もよく言つていた』

とまで言つてくれた、ファンとしてここまで嬉しいことはない。でも、もう少し言葉は選んだ方がいいと思うんだ、スケコマシ扱いされちゃうかもしないし。

『本当に楽しかったよ、ありがとう。お母さんとプレイしていた頃を思い出したよ』

『ほう、評価の方を聞いても良いかな?』

『うん。とつても面白いって言つてたよ。お母さんは箱入り娘だつたみたいだから、ああいう娯楽には目がなかつたんだけど、まさか夜更かししてまでプレイするとは思わなかつたよ。僕がそれを怒ると、「ごめんねシャルロット、面白くてつい」って……』

『——シャルロット?』

瞬間、全身の熱という熱が引いた。

『君の名前は、シャルル・デュノアではなかつたかな?』

その時、僕は取り返しのつかないことをしてしまつたことを悟り、口を滑らした己を呪つた。

『——シャルルくん、いやラファール・リヴァイヴ・カスタムII。先の言葉を説明してもらおうじゃないか』

まるで別人のように刷り変わつた冷たい眼差しが、愚かな僕を射し貫いた。



そうして僕は、洗いざらい全て吐かされた。愛人の子であることも、IS学園にはスパイとしてやつてきたことも、そうしてバレたあとはもう消される未来しかないことも。

そこまで知つた上で、彼はこう言つた來た。「右腕として雇いたい」と。

「右腕つて、どういうこと? 正宗は、もう僕を許す気はないでしょ?」

「では一つ聞こう、ラファール・リヴァイヴ・カスタムII。君は、クロノスのデータを本社に送つたのかな?」

その答えは、Noだ。そもそも今日彼の部屋に来たのはそのデータを送るための収集

をするためだつたから。何一つとして解析出来ていないので送れるわけもない。そう、隠さず正直に言うと、彼のなんの熱もこもつていい瞳と目が合つた。

まるで幾万の真実の中にある砂粒ほどの嘘すらも見抜くのではないかと思えるぐらに、澄んだ眼をしていた。体が恐怖で震えるのを感じた。おかしい、何故僕は恐れているんだろう。嘘なんて、もうどこにも隠せやしないというのに。

「では、私は君を許すことも許さないこともできない」

「えつ？」

「どうやら君はどことん出来ていないらしいな、いやスパイに堕ちた程度だから、か」
「どうして、そんなことを言うのだろう。僕にはもうスパイであるという事実しか残つていないと言うのに！」

「起こつていないこと、証拠もなく君の口から語られただけのことを、許すも許さないもないということだ」

何を、言つているんだろうか。彼は。

「走れ、メロス」という文学作品があるが、私はあがへドをはくほど嫌いだ。

最後にメロスがセリヌンティウスに許しを乞い自己満足のためだけに他人に自分を殴らせるという行為をするが、その後にセリヌンティウスもメロスに同じことをさせ る。

言葉だけのそれを、彼らは容易く信じるのだよ。

全く理解に苦しむ、口から出ただけの物を伴わない眞実など、なんの利益にもなりはない。なんの証明にもなりはしない。

私はそれが嫌いなのではなく、商業でもない場所でそれを行うその精神が嫌いなのだ。証明できず、起こりもしなかつたことに対し許しを乞う。そんなことをしようとも分からなかつた側は許そうとも許さずともその人材を無駄にするだけに終わることに、何故気づかないのか。

だから私はこう思うのだよ、未遂で終わつたことに許しを乞うぐらいなら、その時未遂で終えてよかつたと清々と思えるほどそれに対する行動をするべきだとね

「……は、はは。あはははっ！」

長々とまどろつこしく語つているが、要は彼はこう言いたいのだろう。

特に不快に思つていなければ怒つてもいいのに、しかも実行に移す前の段階で終わつたこと謝られても困る。許されたいと思うのなら、まずは君自身の行動で示してみるべきだ。その道は、私が指示してあげよう。と。

もつと簡単に意訳すると、君がほしいのだけどついてくる気はないか？ 席は用意しているぞ！ だ。

なんて、なんて口下手で不器用で、優しい人なんだろう。

そうだ思えば、ゲーム一つであれほど語り合えたのは彼が初めてだ。冗談を言われてからかわれたのも、間違いを優しく許されたのも。

こうして、全力で誰かに必要とされたことも。

「……私は答えた。次は君が返答する番だと、そうは思わないかね？」

皮肉げに笑うこの姿も、今ではなんだか愛嬌すら感じてしまう。あ、そう思うと正宗つて色々と可愛いかもしれない。大事な資料を無くしちゃうし、口下手だし、不器用だし。

うん、答えはもう決まってる。

「——履歴書は後日でいいですか？」

「……くつ、ははつ。いや、必要ない。私の方でもう作つてある」

そう言うと彼はご丁寧に僕の証明写真まで張られた履歴書を取り出す。というか、どこから回収してきたんだろう、証明写真。

「仕事は迫つて伝えるとしよう。今日はもう帰るといい、時間も時間だ。それと、学校にいるときに敬語は不要だ」

「うん、わかつた。……ねえ正宗、きっと救つてね？」

「ゲンム・コーポレーションは、商品価値のあるものを絶対に無駄にはしない。約束しよう、シャルロット」

そう言つてくれるのがなんだか恥ずかしくて、思わずはにかんだ笑顔で彼と別れてしまつた。

帰り道、月が優しく微笑んでいるように見えて、なんだかとてもおかしくなつてしまつた。だつて今の僕も、きっと同じような表情をしているから。

今日は、よく眠れそうだ。

その後、最初から男装スパイだとバレていたのではないいかと気づいて、かなり頭を抱えてしまつたことは、内緒にしたい。



「ということは、やるんですね社長」

「ああ、君には待たせて申し訳ないと思つてゐるよ」

「いえ、いいんです。社長なら必ずやつてくれると信じてましたから、待つのは苦じやありませんでした」

「そうか。……予定では買収するつもりだったのだが、状況が変わつた。やはり彼女の

商品価値は素晴らしい」

「じゃあ、私の望み通り買収じやなく」

「ああ。デュノア・コー。ボレーションは本日を持つて、」
「絶版だ」

消費者、相川清香の場合

IS学園には、主に目立つた男子が二人がいる。

一人は最初に見つかった、所謂ファーストと呼ばれる織斑一夏くん。頭はあんまり良くなないみたいだけど、十人中三人の女子を一目惚れさせるほどの甘いマスク、誰にでも分け隔てなく接し誰かのためなら真っ先に身を投げ出せる性格なども相まって、彼は学園中の人気者だ。一部邪見にする人たちにはいるけど、この学園でそんなものを表に出していくには生きられないことを悟つてすぐにマスクを被ることだろう。

もう一人は全国適正試験で見つかった、所謂セカンドと呼ばれる檀正宗くん。こちらは織斑くんと違つて、印象は最悪だと言える。頭もルックスもいいけれど、性格や人当たりは最悪。平然と人を見下すし、オタクみたいに部屋の隅の方でパソコンを動かしてし、暗いし、無視するし、オルコットさんを学園から排除したりもした。

正直、最初の頃はかなり嫌つてた。むしろ上記のことがあるというのに好きになれる人物などいるのだろうか。いや、何人かいた気がする。かなりメルヘン入つてて半ば宗教になつてたけど。ともかく私、相川清香は檀正宗が嫌いである。そう、ちょっと前までは。

それはトーナメントより、少し前の話だ。

私の趣味は多種多様である、体を動かすことが好きなので主にスポーツ方面に傾いてはいるのだけど、私も年相応の女子高生らしい趣味も持ち合わせている。因みにマイブームは、ゲームだ。

ゲームは女性らしくないって？ ふふん、その考えはこつちでは古いんだなあこれが。

今やゲームの立場は昔とは比べ物にならないほど上昇しているのだ。とある番組では男女混合老若男女合わせたアンケートで、「あなたは毎日ゲームをして、いますか」という質問に対してもYesと答えたのは100人中90人という結果が出た、と残している。これはつまり街で適当に十人捕まえればその内九人は毎日ゲームをしていることになるということなのだ。

それほどまでにゲームという存在は、現代社会においてなくてはならないものになっている。その原因の一端が、大手ゲーム会社、ゲームの王様と呼ばれるゲンム・コーポレーションだ。ドラクエシヨックなんて目じやないぐらいの社会現象を引き起こしたこともあるこの会社は今や全国に展開、全世界人口の七割がゲームをプレイしているのでは？ なんて話題をお茶の間に流れてしまう程に、ゲンム・コーポレーションは売れに売れている。

因みに、私のイチオシゲームは”ギリギリチャンバラ”だ。スポーツマンに対して強く意識して作られたこのゲームは、一瞬の判断と見切りが物を言う真剣チャンバラゲームである。このゲームは他のゲームとは違い、VR型のゲーム、つまりプレイヤーはまるで目の前にいるかのように感じられる敵キャラと本格的なチャンバラごっこを楽しめるのだ。

ゲームなんて話題についていく程度にしかやつていなかつたのだけど、これには大ハマリした。PvPのゲームでもあつたから、様々な人とオンラインで戦つたし、たまたま出会つた人とチャンバラしたりもした。

ゲームエリア内であれば既に戦場、似たようなもので”バンバンシューイング”というゲームもあるらしいけど、銃の腕がからつきしの私には向いていない代物だつた。

そう、その日はギリギリチャンバラの新ステージの配信日だつた。告知によると、新敵であるカイデンが実装され難易度も一つ上の物が増えると聞いている。とにかく私は授業を終えたその足ですぐに先生が娯楽のために作つた”ゲームアリーナ”に向かうと、驚いたことに先客がいた。我らが一組の担任教師、織斑千冬先生である。

「……やはり腕は鈍つたな。ん……相川か？」

「あつ、はい。あの、どうしてここに先生が？」

「ここは娯楽のためのゲームアリーナだ。となれば、目的は一つしかないだろう」

そう言つて、先生はギリギリチャンバラのゲームカセットを見せた。

この時、私は大層驚いた。あの堅物の先生が、ゲームをプレイするような人間とは到底思えなかつたからである。いや、先生だつて人間だ。ストレス発散のためにタバコも酒もセツクスもするだろう。大人の色氣、というものを感じ斑先生は私の知るなかで一番放つていて。

「まあ、そういうことだ。相川もこれか?」

「はいっ。私、ギリギリチャンバラにはそこそこ自信があるんです」

「ふつ、そうか。……ふむ」

どうしてか、先生は私の頭の天辺から爪先までじっくりと眺め始めた。どこかおかしいところでもあつたのだろうか。

「踏ん張れよ。良く見れば勝機は必ずやつてくるだろうからな」「はあ……?」

それだけ言うと、先生はさつさとアリーナから出ていつてしまつた。なんだつたのだろうか、踏ん張れ、だの良く見ろ、だの言つていたけど。いや、そんなことよりもゲームだ。告知された日からこの時をずっと待つっていたんだ。

カセットを専用のホルダーに差してゲームを起動させると、ゲームエリアが瞬く間に広がり、ギリギリチャンバラの世界を作っていく。そして現実と仮想は溶け込み、

もはや私の目では区別をつけることなど出来はしない。

「さあ……いざ勝負！」

私は専用の刀型のコントローラーを、ゲームスタートの字に突きつけた。



「また負けたあーっ！」

アリーナの床に倒れ込む。

これでもう十連敗だ、いずれもカイデンの手によつて一太刀目でやられてしまつてい
る。負ける度にもう一度、もう一度と何かを掴もうとするも当のカイデンの刀はまさに
変幻自在、何パターン用意されてるかもわからないその流水のごとく乱れのない太刀
筋。私はそれに呑まれ、まんまと翻弄されているというわけだ。

「うーん、もうお手上げだー」

太刀筋を見切れぬのであれば、振るいきるその前に切り捨てる。なんてことも試して
みたのだが、如何せん向こうの振りの方が早くスペツクで負けてしまつていていうこ
とが露呈しただけに終わつた。

ならば先手をとる、と動けば向こうにギリギリチャンバラされる始末。CPU特有の

超反応相手に勝てるわけがないよー。

「手こずっているようね！」

「あなたは、岸里さん！ 何か打開策を思い付いたんだね！」

流石フルアーマーの名は伊達じやない、有能！

「手を貸してあげるわ、と言いたいところだけで私もクリア出来ていないので私もクリア出来ていないので！」

「無能！！」

「だから代わりの打開策を見つけてきたわ！」

そう言つて彼女は引きずつてきただであろう何かを押すことで、それを無理矢理前に出した。

「——無理矢理引きずられてきたから何があつたかと思ひきや、ゲームでクリア出来ないだけの理由でここまでされるとは、全く予想外だ」

「無能!!!」

「断定が早すぎるわ！」

妥当だよ！ どうしてよりもよつて、こんなオタクを連れてきたのさ！ どつからどう見てもモヤシ系だよ、パソコンカタカタして画面向こうの美少女にへらへらしてるのがお似合いレベルのオタクだよそれ！

しかし、連れてきてしまつたものは仕方ない。

「あー、檀くん。これ絶対君には向いてないからさ、早く帰つて仕事の続きをなよ。無理矢理引っ張つてきて、悪いんだけどさ」

丁重にお帰りいただきこう。いつも通りの檀くんならば、証拠さえ貰えればいる意味もないだろうから大人しく帰つてくれるだろう。

「……君に、一つ言つておこう。私は確かに日中ずっと端末機器を弄つているが、かと
いて運動が不向きなわけではない。そのゲームなら私は君より高スコアを叩き出す
ことが出来る」

「……へえ？」

今のはちょっとカチンと来たよ。君みたいな社会不適合者の塊が私よりも運動がで
きて、しかもゲームで高得点を叩き出せるつて？ 笑いが溢れそうになつたよ。

あの試合だってどんな手段を使つたか知らないけど、どうせオルコットさんのISに
予め何かしらのプログラムでも仕込んでたんだろう。そうでもないとISがあんな不
自然な挙動をするわけがない。

つまりところ何が言いたいのかと言うと、

「……嘘」

私が檀くんより劣つてるはずがない、そう思つていたということだ。

勝負は一瞬の出来事だった。その刹那の交差はまさにゲーム名に相応しいプレイで

あり、これ以上に合理的な剣筋を私は知らなかつた。悔しいが、見惚れてしまつた。その一太刀に、その構えに、その振るいに、その姿に。檀正宗という存在を初めてファイルをかけずに見た感想は、全くと言つていいほどに美しさとはかけ離れた存在だ、というものだつた。

ただ実直に結果だけを追い求め、すがり、無駄を削れるだけ削り取つた無機質とも取れる合理的な剣筋。それは紛れもなく、努力が行き着いた一つの果ての形。

「ふむ、久しぶりではこんなもの、といったところか」

檀くんはコントローラーを呆然自失の私に返すと、そのままゲームアリーナを去ろうと足を進ませた。しまつた、このまま行かせてはいけない。

「あ、あのっ！」

気づけば声をかけていた。彼はそのまま振り返りこそしなかつたが、帰る足は止めてくれた。

「檀くん……」

これほどまでに、気持ちが上り詰めたのは初めてだつた、と思う。なんとなく、胸が締め付けられるような気もする。目線はちよつびり落ち着かないし、手だつてなんだか落ち着いていない。

「私と」

不思議だつたけど、考えればすぐにわかることだつた。嗚呼、そうかこれが――

「マイティアクションXの最終スコアで勝負だッ！」
これが純粹な怒りかッ！

「……なんだつて？」

「だから！ 勝負！ マイティアクションXの最終スコアで！」

「どうして私がそんなことをしなくてはならないのかね。いやそもそも、私は何故君に怒りを向けられなければならないのか」

何故、だつて？ そんなの決まつてる！

「――あなたが私のセーブデータでカイデンを倒すからでしようがあッ！」

私は何事も自分で成し遂げることを良しとする人間だ。アドバイスやら手伝いやらは素直に受けとるが、最終的に事を成すのは自分でなければならない。自分がしたいことであれば尚更だ。そして成し遂げた後の達成感は堪らなく心地いい。それを、彼はムツツリとした顔で横からかつさらつていったのだ。許せるだろうか、いいや許せるわけがない！

「……？ 何も言わずにコントローラーを渡したのは君だろう、私はてっきりそのままプレイをしていいものと考えていたのだが」

「それぐらい察するのがゲーマーつてもんでしょう！」

「私はゲームでも、ましてやクリエイターでもないのだが……」

「いいから勝負する！」

そうして勝負して、これもまた驚いた。

なんとマイティアクションXをクリア出来なかつたのだ。いや、確かに難しいギミックのあるステージは多少あれど、難易度だけで言えば小学生でも全機使えば5ステージぐらいならいける。しかし檀くんは、2ステージで全機を使い果たしたのだ。しかも結構アホっぽい死に方で。

彼は絶望的なほどにアクションゲームが苦手だつたのだ。

それを知つた時は驚きまくつて、ゲームオーバーした時の彼があんまりにも喋らないものだから、その場で腹を抱えて笑つた。それはもう大いに笑つた。

「……もう帰つていいかな。私は君と違つて忙しいんだ」

「ごめんっ、ごめんってば！ 流石に笑いすぎたのは悪かったと思つてるよ！」

「そう思うのなら早く帰らせて欲しいのだが……」

「待つて待つて。もう少し遊んでよ、まだやつてほしいゲームいっぱいあるし」

ゲキトツロボッツとか、シャカリキスボーツとか、あとジエットコンバットもやつてほしい。

「……君は私と遊ぶのではなく、私で遊びたいだけだろう」
「ハテサテ、どうかな」

——まあ、そういうこともあつて、今や檀くんは私や私の仲良しグループとは良好な関係を築けてると言えるだろう。本人もなんだかんだ面倒見がいいし、無理難題でなければ手も貸してくれる。

彼がゲンム・コーポレーションの社長と知つた時は驚いたけれど、私たちにとつてはむしろ都合がよかつた。何故なら、堂々と裏技について尋ねることが出来るからだ。まあ、何一つとして教えてはくれなかつたけど……。

例え彼が社長であつたとしても、私たちの関係は恐らく変わることはないだろう。だつてこんなにも親近感があつて、ゲーム勝負で私たちに負けてばつかりの情けない、その分なんだか愛らしいただの同級生の一人なんだから。

ゲンム・コーポレーション／取るに足りない凡作

「——諸君、忙しい中こうして出席してくれたことを、心より感謝しているよ」

上座に当たる席に腰を下ろし、十人にも満たない幹部の前でそう言い放つた。

言葉は概ね本心だ、実際我が社は今新作の開発や数々の企業との会談にと、てんてこ舞いの毎日だ。見渡す限り、顔色が悪いのもちらほらと見える。

我が社は自他共に認めるホワイト企業であるから、定時に上がれているものがほとんどのはずだが、どうやら自主残業をしてくれているらしい。流石は私の認めた商品達だ。素晴らしい活躍を期待していると言つたが、ここまで身を粉にして働いてくれるとは、社長である私も鼻が高いと言うものだ。

「社長、出来れば手短に済ませてほしいなうって思うんだけど。今結構良いところですか？」

「CKO、社長の御前だ。文句を言うならあの出来損ないを代理にすればよかつただろう。お前よりは態度は有能だぞ」
「あ？ 出来損ないはどつちだよCSO。無駄に時間長引かせてさ、迅速に行動するようつて社長も言つてたじやん」

「あれも戦略の一つだ。シナリオ一辺倒のお前には分からぬかもしけないがな」「迅速の言葉の意味もわからぬのかよ、無駄を戦略と呼べる君の頭の方がよっぽど—

L

二人の言い合いはそこで止まつた。いや、止まらざるを得なかつた。それは二人の首もとには異なる凶器がそれぞれの頸動脈に突きつけられていたからに他ならない。手を軽く上げてそれ以上を止めると、凶器はすぐに彼女たちから遠ざかつた。

「二人とも。我が社のことを考えてくれるのは、CEOの私としても大変喜ばしいが、會議を妨げるのは少々頂けない。聞き分けが悪ければ……分かるだろう?」

「ごめんなさい」

「：申し訳ありません」

良い。ご苦労だつたな、CIO」

そう軽く礼を言うと、CIOはらしく頭を恭しく下げる。

「さて、今回集まつて貰つたのは諸君らに新たな仲間が増えるのと、先のことについての報告だ。まずは顔合わせと行こう」

入りたまえ、と一言声をかけると扉は静かに音をたてながら開かれ、金髪の美女が新品のスーツを見にまといで入室した。

そう、先日私の右腕としてスカウトしたばかりの商品、シャルロットだ。

「シャルロットです。この度、社長の右腕としてスカウトされ、まずは見習いとして本社で働くことになりました。よろしくお願ひします」

と、やはり落ち着いた声色で紹介を済ませた。それにもかかってはいたがなかなかの胆力だ、この場にいる人物は皆そこそこに有名人のはずなのだが、柔らかな笑顔のまま表情筋一つ崩れていない。見習い卒業は、思つたよりも早いかも知れないな。

「彼女には次期CFOとして働いてもらうつもりだ。教育は現CFOにしてもらうが、教育の一環、君たちの元に訪れる可能性があることを覚えておいてほしい」

幹部たちはそれぞれのらしい返事を返しながらも、シャルロットの価値を定めるように視線を向けていた。素晴らしい、私の目だけを信用することなく自分の目で価値観を測る。それでこそ我がゲンム・コーポレーションの商品だ。

「時間もないことだ、親睦を深めるのは後にしてもらおう。さて、諸君らの目覚ましい活躍の成果もあつて、デュノア・コーポレーションは見事に絶版された。CKO、君の知識から来るシナリオは素晴らしいものだった。多少のブレはあったものの、当初の通り我が社の勝利に搖るぎはなかつた。Good Job」

「報酬には期待していいんでしょ？」

もちろんだ、と頷き返す。一番スカウトに手間も資金もかかつたが、やはりこれ以上の成果を出すCKOはもはや人類には存在しないだろう。キッチリと手綱を握つてお

かねばならないな。

「C S O、君の戦略は見事に彼らを転がし、最初から最後まで彼らは君の手のひらから抜け出すことは敵わなかった。Good Job」

「お褒めに預かり光榮です。ですが先ほどのC K Oの言う通り無駄があつたのも事実、これからも貴方の元で研磨することを、どうかお許しを」

「より一層の活躍を期待しているよ」

その言葉にC S Oはまた深々と頭を下げる。盲目的で扱いやすいのは利点だが、こちらの褒めに対し一步引いて受けとるのは頂けない。謙虚と言えどもそれまでだが、そろそろ正面から言葉を受けとるべきだ。今度キッチリと話をつけるとしよう。

「C I O、そしてシャルロット。君たちが我々に与えてくれた情報には一寸の狂いもなかつた。C K OとC S O、二人だけでも勝利は勝ち取れただろうが、君たちのお陰で我が社にの被害経理は想定を遥かに越えた最低額で済ませることが出来た。Good Job」

言葉を受け取つた二人はただ静かに頭を下げた。C I Oは相も変わらず無表情だが、シャルロットはどこか嬉しそうな気配を隠しきれていない。彼女の環境のせいだろう、あまり必要とされることも必要以上に褒められることもなかつたと聞いている。その点我が家は仕事に対して正当な報酬を与える、これからも慣れずにどこぞのゴミのよう

に慢心しないことを期待しておこう。

「デュノア・コーポレーションのラファール・リヴァイヴは我が社の傘下である倉持技研がその権利を持つことになった。そのため彼らの上司に当たるCTOがそのまま管理に当たることになる」

「そういうえばあのマサコンがいないね、珍しすぎて槍どころか天変地異すら落ちてきそうなんだけど」

「彼女には別件の仕事を依頼してある、その用事で今回の会議には出席できないと先日連絡があつた」

「CTOの発明の成果のおかげで我が社の商品たちへの被害の全てを抑えることができた、その仕事ぶりを褒めたかったのだが仕方ない。また時間のある時に言葉だけ伝えるとしよう。」

「道理でCIOがカメラを持つていると思つた」

「つていうかいいの社長、余すことなく撮られてるけど」

「……彼女への報酬だ、多少は目をつむろう」

思つていたのだが私の回りの人間はどうしてこうどこかしらネジが外れているのか。スカウトしたのは私だが、誰がこんなダメな人間になることを想像する。しかし商品価値だけはしっかりと示してくる、仕事は完璧に仕上げる。正当な報酬を与えるのが我が

社の基本とは言えここまでだと少しばかり嫌になつてくる。

ええいやめろ C I O、私のローアングルのアップなどなんの価値もない、それ以上踏み込んでくるなら絶版にするぞ。

「……さて今回の緊急会議はこれにて終了だ。諸君らの変わらぬ奮闘に期待しているよ」

笑みを深めてのその言葉を持つて会議の終わりとした。

世界三位のデュノア・コーポレーションが沈んだからと言つて、まだ満足など出来てない。我が社はこんなところで止まりはしない、ゲンム・コーポレーションは必ず世界一へと上り詰める。

他でもない、私の商品価値を持つてして。



I S 学園には毎年開催される、全生徒による学年別トーナメント戦がある。

二ヶ月ほどしか動かせていない一年には少々酷だが、この短い期間で学んだことをどれほど活かせるか、またどんなことが足りていないのか、どれが自分に適した使い方なのか。そういうことを学ぶことが出来、また教師もそれを知ることができる。このトーナメント戦は、

ナメント戦は I S の教育上必須事項でもあるのだ。

二年はこの一年で学んだことをどれだけ発揮できるか、そして三年に向けどのよう問題点を解決するのかを学ぶ機会。そして三年は来場者でもある大手 I S 企業に自身を売り込む、謂わば就職活動の一環もある。

去年に比べ今年は専用機持ちが多く、ツーマンセルにしタッグ戦方式としたが、奇数であるため一人余ることになる。

だがその問題はすぐに解決することになった、クラスでも一人でいることが目立つ檀が一人で出場する旨を申し出てきたからだ。

今まで碌に授業にも参加していない奴が何を言うか、と否定しようとしたが彼以外の大半は非戦闘経験者であることも相まって教師一人で否定する材料はあまりにも少なすぎた。返事は延期としどにかく会議に持ち込んで解決案でも探ろうかとしたが、それも徒労に終わった。

賛成の意見を述べる教師があまりにも多すぎたからだ、彼らたちはどれも I S という存在のお陰で自らの地位を高めたものばかりで、一夏と違つて檀は大きな権力を持ちながらも I S を動かしたため、後ろ盾がある。その後ろ盾があまりにも自分の邪魔だから、これを機に恥を晒してあわよくば手を引くことを望んでいるようだつた。

もちろん建前はこれ以上にないくらい綺麗事だ。やれ「彼の腕前を正当に評価するこ

とができる」だの、やれ「これからは教育方針にも関わってくる」だの、やれ「これを機に I-S と真剣に向き合ってくれるかもしれない」だの、やれ「I-S 学園の一生徒としての自覚を持つてくれるかもしれない」だの。内面に本音を隠しきれていらない者ばかりだ。それが生徒の前に立つ教師の思うことか。

否定の意見を上げる者は私を含めて三人ばかり。結論は「やらせてみせて状況判断、明らかに敗けが見えた場合は担当教員が介入して試合を強制終了させる」ということに落ち着いた。

担当教員は、よりもよつて否定の意見を述べた者の一人だ。私や山田くんが着ければよかつたのだが、うちのクラスには檀を含めて問題児が多すぎることもあって、そちらが問題を起こさない、また起きた場合のバックアップに回る担当に着いてしまった。

そういうことを報告しなければならない、ということもあって今朝は頭が痛かつた。生徒に正々堂々と恥を晒してこいと平然と言える厚かましい教師などそうそう居ない、少なくとも私はそんなこと言つて心を痛ませないほど非情ではなかつた。やるからには勝たせてやりたいし、そのための最善の道を示してやりたいと思うのが教師として普通ではないだろうか。

しかし当の本人は告げられても表情ひとつ変えず、いつぞやの時のように言い放つた。

『問題ありません。私が勝つに決まっていますからね』

自身の敗けを一点足りとも信じていらない、曇りない勝利への自信。驕りとも慢心とも違うその姿に、思わず歳を疑つたが担任としては嬉しく思った。

『良いだろう、そこまで言つたんだ。勝ち点の一つでも上げてこい』

『ええ、一点どころかコールド勝ちして見せましよう』

こいつなら出来る、そう思つてはいたが、認識が甘かつたと知るのは大会当日のことになる。

トーナメントとは言つているが、その大会表を決めるのは教師の仕事ではなくコンピューターの仕事となつていて、つまり誰と当たるかわからない、完全ランダムの状態。誰が一回戦に選ばれてもおかしくないと、どの学年も戦意や恐れ、緊張で満ちていて学園全体が良い空気となっていた。

そうして選ばれた一回戦の組合せは、檀正宗とフランスやアメリカの代表候補生のタッグ。

「——やられた……！」

最悪の組合わせだった。よりもよつて戦争経験者の二人と檀が戦う羽目になるとは。いや、そうじやない。これは間違いなく意図的な物だった。

完全ランダム制と言つても、これは生徒の教育の一環で行われる行事。そこで代表候

補生と全くの素人が初戦で鉢合わせしては、互いの教育のためにならない。そのため、どの生徒にも必ずまともに試合できる機会が少なくとも一度だけあるように設定されているのだ。それをするためにコンピューターと生徒の来歴等が入っているデータバンクを繋ぎ、コンピューターにはある程度同じ強さやセンスを持ち合わせたものたちを初戦にぶつけ、自らの力を確かめさせることができるようにしてある。

檀は全くの素人である、ISにはまともに乗ったこともなく、セシリア・オルコットでの試合も何が起こったか正確に把握できていないため、教師側では無効として扱っている。つまりデータ上の戦闘経験は0のままのはずだ。それが戦争経験者のタツグの対戦相手になるなんて、あり得るはずがない。

今日という日のためにコンピューターはちゃんと今朝にだつてメンテナンスを受けている、つまりコンピューターの不調はあり得ない。とすれば間違いなく、データが書き換えられているのだろう。それも檀のデータを。

犯人など見え透いている、いや心当たりが多すぎて逆に困るぐらいだ。

既に試合の始まる準備も進んでいる、今さらデータ改竄の疑いがあると止めるには確かめる時間も人員もない。試合は滞りなく進むだろう。教師として、私が出来ることはなんだろうか。無理矢理にでも介入して試合を強制終了させることか、私もあるいつも恥をかくことは避けられないがこれから道を断たれるよりはずっとマシだ。今から準

備をすれば、試合が開始するくらいには済むはずだ。

試合が開始する前のインターバル、両者がアリーナの中で見合っている状態。私は準備に手こずっていた。まさかここまで手を伸ばすとは、向こうも随分と本気のようだった。これでは試合開始から数分経たなければ出撃すらままならない状態だ、それほどの時間があればISの試合などもう終盤だ。半ば道は断たれるも同然だ。

準備を急ぐ私の耳に、生徒の声が聞こえてくる。

「残念だつたね、よりもよつて私たちと鉢合わせするなんてさ」

「これでも戦争を経験しててさ、戦いには結構自信があるんだよ」

「どうか、道理で君たちには自信に満ち溢れているわけだ」

「アイシヤとは二ヶ月ほどの付き合いだけど、考えも似てるし、自分で言うのもなんだが、私達は優勝候補だ」

「そのISはISを操作するものみたいだから、対策としてジャミングも装備させてもらつてるよ。つまり君はもうただの素人つてこと。そういうわけだからさ、怪我する前に棄権した方がいいよ。絶対防御は痛みまでは庇つてくれないからさ」

好き勝手に言つているが、実際その通りだ。それに対策まで張られてしまつては、檀は自身の腕前だけで勝たなくてはならない。それも、二人を相手に。檀がこの状況で勝利するのは、万が一程度と言える。つまり、一方的になぶられるだけの試合が行われる

ことを意味していた。これが気に入らないという理由だけで生徒にすることか。だが絶望的である状況であつても、檀の声色は変わらなかつた。

「忠告痛み入るよ。だが問題はない」

「はあ？」

「こんな状況でさえ、あいつの言うことは変わらない。

「私が勝つに決まつている」

虚勢でも、驕りでもないその一言が私の手を止めさせた。二人に負けないほどの自信に溢れたらその一言に、どうしようもない期待を抱いたからだ。こいつなら、きっと一矢報いる。そういう展開はスポーツマンとして嫌いじやない。やつてみろ、檀。嬉しく思つた私の気持ちを裏切るなよ。

「……強がる私カツコイーつて感じ？ ウザ」

「氣で負けるようになるのは戦場でも悪くない。だがこれは戦場でも試合でもない。

「一方的ななぶり殺しだ」

「ああそだうな。君たちの意見には全面的に賛成だ」

「——今から行われるのは一方的な審判だ」

『BUGL UP!』



戦いは終始一方の有利に進められていた。

当たり前だ、片方はずぶの素人である私、もう一方は戦争経験者でタツグだ。どちらが有利に思えるかなど火を見るよりも明らかだ。

「当然、始まつてからずつと無傷の私が押している。
〔F u c k！〕

「Fワードを公共の場で使つてはいけないと親に教わらなかつたのかね？」

罵倒と共に放たれる数十の弾は対IS用に作られたものなのだろう、弾自体にも相応の加工をしてSEを削り取ることを目的とした形状をしている。当たればISとは言えただではすまないかもしれない、だが相手が悪かつた。何故なら、君達の前に立つているのは私というクロノスなのだから。

時計を模した半透明のシールドが余すことなく銃弾を遮断する。速度に物を言わせ何度も角度を変えては射撃をしているが無意味なこと、襲つてくる弾丸は全て消えては現れてを繰り返すシールドを前に足下に届くことすらなく跳弾してはあらぬ方向へと跳んでいく。

「——ツ！」

「奇襲のつもりか？」

普通ならば死角である方から迫り来る刃の一撃を、事も無げに弾く。受けてやつてもいいが、ＳＥが減らないことに疑問を抱かれるにはまだ早い、クロノスのスペックが判断するのはまだ後々でなければならない。そういう筋書きがあるのであれば尚更だ。

奇襲は無駄と悟つたのか白兵戦に持ち込んでくるが、これもまた無駄だ。私はこういうゲームに対してもだけは得意と言ひ張れることが出来るほどには訓練を積んでいる。

割合的にはクロノスのスペックの方が上、というのが多くを占めるのだが。

「これでも食らいやがれ！」

振るわれる刃を余裕をもつて弾くだけのゲームをしていると、白兵戦役のＩＳが急に下がつたと思えば、援護役のＩＳが何かを放り投げてくる。それは間違いない、パイナッフルとも呼べる手榴弾。点は無駄と悟り面での攻撃をしてきたか。

別段受ける理由もない、それに蠅のように飛び回られるのもいい加減耳障りで目障りだ。

バグルドライバーⅡのＡＢボタンを押す。

『PAUSE』

数瞬後、世界は静寂に包まれ、クロノスに支配される。

宙に浮いたまま止まつてしまつたの手榴弾をボールの如く蹴り飛ばし、勝ち誇つた顔

を浮かべる白兵戦役のISにぶつける。そして爆破の範囲から逃げるよう撤退の構えを取るISに近づき、ボタンを押した。

『CRITICAL CREWS-AID』

「君はもはやゲームとして遊び飽きた」

エネルギーを集中させた拳を顔面へと叩き込む。絶対防御が立ちはだかっさせいで直接肌に触ることは敵わなかつたが、既にその威力は余すことなく叩き込んでいる。殴打を受けたISは宙で二三回転し、再び止まる。もはやゲームオーバーからは逃れられないだろう。

「このゲームは絶版だ」

『RESTART』

世界が動くことをクロノスによつて許される。それと同時に今までしたことの全てがIS達を襲う。援護役のISは威力の勢いのまま縦に回転、その後地面に墜落し、そして白兵戦役のISには0距離手榴弾の洗礼を全身に受けていた。

『……ミーシア・ドゥテルテ、ダウン』

「み、ミーシア……？　ど、ミーシア！」

まだ稼働中のISは何かを探すように、いやまるで狂つたかのように辺りを見渡す。探しているものなら私の足下で土遊び中だ、と教えてあげようとしたがどうも様子がお

かしい。

「あ……あ？　あ、??∞℃？,%?≥*・士◆÷◇≠●☆♀◆♂士！」

「……ああ、鼓膜が破れてしまつたのか」

そういうえばあの手榴弾、結構な至近距離で爆発していたような気がする。絶対防御は威力を殺してはくれたが、突発的な爆音までは防ぎきれなかつたのかも知れないな。もしくは、そういう所を削つて別の部分を改良したそういうISだつたのかも知れないが。彼女のようなゲンム・コーポレーションの商品にもなり得ない者達の情報管理はCIOの仕事だ。私の耳に入らなかつたということは、取るに足りない凡作だつたと言うことだろう。

しかも悪いことに、爆破を間近で見たせいか目まで悪くなつてゐるようだ。恐らく一時的な物だろうが、見えず聞こえない状況というのはあまりにも辛すぎることだろう

「では君も絶版だ」

足下のISの私物であるマシンガンを拾い、それをクロノスの力でハッキング、使用可能にし発狂したように暴れまわるISを的に見たてトリガーを引いた。

しばらくするとSEが切れ、見たことがあるようなないような教師たちがアリーナの中に入つてきては彼女達を回収していく。それを見送つてから、つまらないゲームで遊ぶことほど無駄なことはないと改めて考えに耽つた。



試合は終わつた、だが誰一人として歎声をあげることはない。I Sのハツキングが出来るI S、檀の専用機に対する印象は正にそれだつた。だが蓋を開けてみれば、その性能は圧倒的だつた。銃弾を自動的に悉く防ぐシールド武装、本人の高い戦闘技能、そしてハツキングでもなんでもない単一仕様能力。

あいつの目の前で爆発するはずだつた手榴弾は対戦相手のすぐ側に瞬間移動し爆破、もう一人はまるで見えない一撃を与えられたかのように吹っ飛びダウնした。そう、あれはまるで停止結界で受けたダメージが跳ね返つた時のような挙動だつた。

理解不能、会場にいる全員がその状態のまま呆けるほどに。私はそれを見てやりすぎだと思う反面、スッキリとした気持ちで眺めていた。そして、アイツの有言実行するその姿勢に、どこか好ましさを抱いてたような気もした。

数分後、檀はこれ以上のトーナメントを辞退する代わりに二回戦目である愚弟対ラウラの試合に参入する許可を携えて、再びアリーナへとやつてきた。

主人公、織斑一夏の決心

それは、クラス代表決定戦が終わつた後のことだ。クラスの皆が檀を避けていく中、俺もその中の一人として考え事をしていた。檀がどうやつて勝つたのか、何故檀はクラス代表を辞退したのか。そういうことを考えてなかつたとなれば嘘になるけど、もつと別のことを考えていた。

オルコットさんはどこに行つてしまつたのだろうか。

今大きく頭の中を占めているのはそんな疑問だつた。そりやあ、オルコットさんのことを全面的に悪く思つてないと言えば嘘になるけど、少なくとも俺たちは啖呵を切りあつた、あの瞬間だけであつても俺たちは確かにライバルになつてたんだ。ライバルのことが気にならないわけがない。

檀の試合に負けた後、オルコットさんは忽然と姿を消してしまつた。気がつけば学園から名前が無くなつていて、本当にどこに行つてしまつたのか、それこそ大人でなればわからぬ状態。せめて一目でも会えれば、一言伝えたいことがあつたのに、それもう叶わないのかもしれない。

実家のイギリスに帰つたんじやないか、なんて噂も流れたけどなんの言葉もなく突然

消えてしまふことなんてオルコットさんに限つてあり得ないんじやないか、と思つた。クラスメイトは大口叩いたのが恥ずかしくなつて帰つたんじやないかとも言つてたけど、それなら益々一言もないのが気になつてしまふ。けどもし実家に帰つてしまつたのなら、一体いくらぐらい貯めればイギリスに行けるだろうか、そんなことを考えていたら気がつければ夜になつていてもう風呂から上がつた後だつた。

せめて誰か一人でもメールアドレスを知つていればなあ、と思つたところでノックが響いた。はつとして返事の後に扉を開くと、知らない女性がメイドの格好をしてしやんとした姿で立つていた。

「えっと、誰ですか？」

「貴方様宛にお手紙です、織斑一夏様」

差し出された手紙を反射的に受け取つて、気づいた。宛先に書かれてるのは英語の筆記体で、俺には到底読めるようなものじやなかつた。なんとなくIが一番最初に来ているから、恐らく彼女の言う通り俺宛で間違いない。差出人の名前も同じく筆記体で書かれていて、十全に理解は出来なかつたが読めた。

セシリア・オルコット。そう丁寧な字で記されていた。

「これをどこで……ッ。えつ」

跳ね上げるようすに顔を前を向けると、そこに先程までいたメイドさんの姿はなく、そ

の場に残されたのはただ驚く俺と手紙だけ。耳を澄ませても聞こえるのは笑いあう女子の声だけで、足音なんて一つもしない。ISを使うわけにもいかないし、現状で彼女を追うのは不可能だつた。

ドアを閉め、机に向かい、赤い蝶のようなもので閉じられたそれを破いて、開いた。

『織斑一夏さんへ。

まずは面と向かい言葉を交わさずこのような形で気持ちを伝えること、そして先日での数々の暴言、お許しください。

私は今、イギリスへと送還の途中の車の中でこの手紙を綴っています。何故、そんなことになつてしまつたのか。貴方には伝える必要があると思いましたが、携帯端末すら取り上げられてしまい、現状こういう形でしか伝達手段がありませんでした。

どうして伝える必要があつたのか。それは檀正宗を止められるのは織斑一夏さん、貴方以外に存在しないからです。

あの後、檀正宗の一撃に倒れた後。あまりにも一瞬過ぎる幕引きに私は敗けを認められませんでしたが、次の貴方との試合もあつたのですぐにでも貴方を倒そうと準備に入りました。啖呵を切つたからには、例え直前で無様を晒したとしても引き下がる訳にはいかなかつたのです。どれだけ愚かであつても、自分の言葉には自分で決着をつけるつ

もりで。しかし貴方も知つての通り、それは叶いませんでした。

ゲンム・コーポレーションを名乗る存在が私からブルー・ティアーズを取り上げ、すぐには拘束し連行していったからです。その後彼らは何も語るようなことはありませんでしたが、リーダーらしき人物は私を見て一言、「貴方にもう商品価値はない」とだけ残して後は社員らしき方たちに任せて去ってしまいました。

気がつけば、ブルー・ティアーズはISコアの動作不良による起動不可能状態にされ、その責任は全て私に着せられていきました。濡れ衣だと何度も抗議しましたが、私の祖国であるイギリスまでゲンム・コーポレーション側についていて、全て切り捨てられてしまいました。結果私宛に莫大な賠償金が請求され、それらはほぼ全て借金となつてしましました。

努力して守ってきたオルコット家の財産も、賠償金の前では焼け石に水、これから私がどうなつてしまうのか、それは私にもわかりません。

あまりに理不尽な仕打ち。しかし不思議なことが幾つもあることに、貴方はお気づきでしょうか。

まず、IS学園に属している生徒に対しては、基本的には如何なる国家も手出しをすることはできません。国家にすら無理なことを、ただの一企業がどうして出来てしまうのか。

また、どうしてただの企業が I S コアを起動不可能状態にできるのか。授業でも言っていた通り、I S にはまだ不明な点が多く存在しています。特に I S を I S 足らしめる中心部のコアは、篠ノ之博士以外には理解しえないブラックボックスと化していく、これが I S を量産できない大きな理由となっています。それを動作不良するようになるなんてこと。出来るはずがありません。それこそ、篠ノ之博士でもない限り……。

そして一番の謎は、檀正宗の I S です。誓つて言いますが、私は彼から一度も眼を離していません。I S のハイパー・センサーだつて、むしろ絶好調だつたくらいです。ですが気がつけば、私は強烈な打撃を受け、壁にその身を叩きつけられました。

ゲンム・コー・ポレーションという企業、そして檀正宗という存在。思えば彼のようない人が I S 学園に来たことすら不思議でなりません、まるで I S 学園で何かを企んでいるかのよう、そんなことすら考えてしまうほどに。

ただの人間、特に国家代表候補生程度では彼に太刀打ちすることすらできません。ですが織斑一夏さん、ブリュンヒルデの弟である貴方ならば、彼を打ち負かすことも、ゲンム・コー・ポレーションを阻止することが出来るかも知れません。

こんなことを貴方にお願いするのは、短い付き合いではありましたがあくしてくれた先生やルームメイトを守るため、そして一瞬ではありましたが貴方に立ちはだかつたラ

イバルであつたから、貴方にどうにかしてほしいのです。

私の夢の舞台であつたＩＳ学園のことを、よろしくお願ひします。

追伸

私がいた部屋に、天蓋付きのベッドがあります。あれはただのベッドではなく、ブルー・ティアーズの稼働データがリアルタイムで送信されるデータバンクでもあつて、寝る直前に見返すことが出来るようになっています。今となつてはただのベッドですが、もしかしたら檀正宗の攻略の糸口になるかもしません。どうか、ご活用ください。』

手紙が少しくしやりと歪んだ。そこで自分が無意識に力を込めていることに気づいて、手紙を離し、机に拳を叩きつけた。

「檀、正宗——」

思えば、オルコットさんはあんな啖呵を切つた後でも話しかけるクラスメイトが後を絶たなかつた。人徳とか、性根とか色々と理由はあつたんだろうけど、何よりもその姿勢、努力を怠らずただ自らを高める。そんな姿勢に皆引かれたのかもしれない。それに俺が知らなかつただけで、檀ですら彼女のことは知つていた。

今なら分かる、彼女は本当にすごい人だつたんだ。圧に屈することなく、ただ前を進み、己の努力の結果を掴み取つた。まるでサクセスストーリーに出てくる主人公のよう

な彼女に、今更ながら尊敬の念を抱いた。

きつと多くの努力をして結果を勝ち取ったのは、オルコットさんだけじゃない。この学園にいる皆がそれぞれ血の滲むような努力をして、それでも届かなかつた人もいれば、掴み取つた人もいる。IS学園にいる俺以外の人間が、誰もが尊ぶような経験を経てそこに立つている。

それを、檀正宗は自分に対しては価値がないからという身勝手な理由だけで何でもないような顔で踏みにじつっていく。
どうしようもなく、許せなくなつた。

「俺は、やるぞ。オルコットさん」

聞いたところ、IS学園には行事の一つとして学年別トーナメント戦なるものが開かれるらしい。檀正宗と決着をつける最も大きなチャンスはここにある。
檀正宗、お前が何を企んでいるかなんて俺には分からぬ。でもこれ以上させやしない、暴君のような振る舞いを、権力で努力を嘲笑うような真似を。

「皆を、守つてみせる」

籠手として眠る白式が、同意するかのように小さく煌めいた。



「ブルー・ティアーズのデータは役に立ちそう?」

全ての企業の最先端を行くような技術室で、二人のうち一人がもう一人へと呟いた。
もう一人は静かに首を振り、口を開いた。

「全然。あのクソゲーはブルー・ティアーズの力を五割も引き出せてなかつた。だから取れるデータも無駄だらけ、どうしてこんなもので代表候補生を名乗れたか、不思議なくらい」

歯に衣着せぬ言い草に、一人は苦笑を漏らしたが決して否定はしなかつた。ブルー・ティアーズに限らず、B I T 兵器を搭載しているI Sにはあるテクニツクがデータとして搭載されているが、セシリア・オルコットはそれを使うどころか手が届くこともなく手放すことになつてしまつた。これに一人は大いに不満そうな表情を浮かべる。

「たどり着く条件、環境、そしてI Sまで用意してあげたのに、こんな結果じやあしようがないか」

「結構大変だつたつて別動隊も言つていた。搭乗機にウイルスを仕込んで、情報規制をして、周りの人間に吹き込んで、人員まで派遣したのに。これじやあ彼らが浮かばれないい」

「まーくんも期待してたのに、かわいそだよね。別動隊にはちゃんとした手当てが行くから問題はないだろうけど、これじやあまーくんが浮かばれないよ」

一人はケラケラと笑っていたが、もう一人はムツツリとした顔でデータの編集を行つ

ていた。表情からは読み取ることはできないが、真逆のようにも見える両者にも一つの共通点があつた。

内心は、腸が煮えくり返るほどに怒つてているという点だ。

「……あー、賠償金もつと高めておくんだつたかなあ。いや、むしろ周りの情報操作もして迫害でもさせるべきだつたか？」

「そこまで露骨だと確信される。ただでさえ嗅ぎ付けれるように示したのに、これ以上ヒントを与える必要はない」

「そうだけどさあ」

「それに」

一人がキーボードを一度叩く。すると画面はデータの束から一つの映像に移り替わり、一人の金髪の少女が複数の男性に狩り場のように囲まれている状況が映し出された。

「うちのC.I.Oは、もつと上手くやつてるみたい」

「うーわー……えげつないことするなあ、こんなのトラウマどころか……まつ、いつか」
うんうんと頷くと、本当に興味をなくしたのか一人は機械的それをピコピコと揺らして背を向けて歩き出した。

「あれの準備は？」

「ばつちぐー！ もう後は書き換えるだけってねー！」

「わかった。後でそつちに向かうから、資料の準備もしておいて」

「おつけー。じやあまた後でね、CTO」

黒の白衣をはためかせて退出したのを見届けると、一人は再びデータの束に向き合つて、編集の作業に没頭していく。

シユヴアルツエア・レーゲン

ISの世界において、ISバトルとは基本的にシングルやタッグのことをさす。その方が見所も多いし、なによりISの速度は尋常にそれを通り越しているので、機体の数が少なければ少ないほど一般人にも理解しやすいので人気が伸びやすいというのもある。

しかしここで起きようとしているのは、そのどちらでもない。バトルロイヤルのような無秩序だけではない、タッグバトルのような規律制だけでもない。今ここで始まろうとしているのは、その二つが混じりあつた三つ巴戦である。

軍人、一般男子、そして私。こんな珍妙な組み合わせをしているが、学園にいるゲンム・コーポレーションの社員は私の勝利を信じて疑つていらないだろう。しかしアリーナを見つめる幾万の観客はこの試合がどう転ぶのか、勝者は誰になるのか、全く読めていないだろうし予想以上のことを出来ていないだろう。

私にはわかる。数学ほど難しくなく、文学ほど奇つ怪でもないのだから。この戦い、どう転ぼうとも私の勝ちで終わる。

「織斑一夏、貴様だけは必ず私がこの手で捩じ伏せる。そのついでに檀正宗、貴様もな」

「お前に興味はない。俺の敵は檀一人だけだ」

「随分と嫌われたものだ。では私の前には敵無し、と言つたところか」

一人は怒りを滲ませ、一人は憎悪をたぎらせ、一人はどこ吹く風と態度に余裕を含ませ。三者三様に互いの顔を見合わせ、二人は体に力を入れ構えを取る。私は焦る必要も先手を取る必要もないため、いつも通り威風堂々と立つだけで後手の一撃を決めることが出来る。なんなら力を使えば絶対の先手が取れる。

精々足搔いてもらおうじゃないか。

『試合開始!』

開戦を告げるブザーが鳴り響いた、と同時に二人が動く。

一人は手刀を構え、一人は刀を持ち、ISのスピードを存分に使い瞬きの間に三桁もあつたであろうクロノスとの距離を一桁、それこそ手を伸ばす範囲にまで詰めてくる。

そのスピードは、これほどの速度を出すことが出来る兵器などISが確立されて未だに存在し得ないだろう、と思わせるほど恐ろしいものだ。

しかし所詮その程度。クロノスのスペックを持つてすればどうにかするなど訳ない。

瞬時に振るわれた腕を掴み攻撃を無効にし、スピードの勢いそのままに両者をそれぞれあらぬ方向へと放り投げる。

すると一人は極僅かな滞空時間でレールガンを展開、照準し射撃。一人は瞬時加速を

持つて離した距離を積めてくる。

レールガンも白式もその速さはまさに雷、だがどれもこれも無駄な足掻きだ。クロノスを装着した私にとつてそれでもまだあまりにも遅すぎる、幾つも思い浮かんだ対処法を余裕の気持ちで選べてしまうほどに。

ふむ、それではこれでいこう。

レールガンには時計盤のシールドを、白式には半身を反らした後に蹴りを叩き込み再び距離を空けさせてもらう。

しかし見事な連携だった、クロノスでなければどちらかの対処は出来てもどちらかがダメージになり、また対処したそれも受けることになつただろう。

「シユヴアルツエア・レーゲン……共闘のつもりか？」

「勘違いするな、織斑一夏は私が潰す。そのためには貴様が邪魔だ、檀正宗っ！」

非固定武装から四つのワイヤーブレードが飛び出し、鋭利な先端をもつて突き刺そうと迫り来る。まるでそれぞれが龍の首のように自由自在に舞い、回避先をもつて突き刺そうに動き襲いかかつてくる。なるほど、操作のできる武装ならば時計盤を迂回し私が持つ防御策の一つを無意味にすることができる、そういう腹積もりのようだが。そんなことは間違いなく徒労に終わる。クロノスには回避不可能であり、絶対無比なる力が宿つているのだから。

『PAUSE』

ドライバーの両ボタンを押すだけで世界は静止する。あらゆる波は声を潜め、クロノスという絶対的支配者の前に頭を垂れる。いくらISという超越された力を身に付けていたとしても、クロノスを持つてすればただの置物に早変わりする。

「君達にはまだ商品価値がある、出来れば傷つけたくないのだがね……」

白式はこちらの様子を伺つているのか身を遠くに置いたままで、その構えから隙あらば飛び出そうとしていたのは明白であった。シュヴァルツェア・レーゲンはレールガンとプラズマ手刀、そして残つた二つのワイヤーブレードで彼女もまた隙を突こうとしていたのだろうということが分かる。こうして止められてしまつては無意味に他ならないがね。

拳を握り、振りかぶり力を込めて殴り抜けようと一撃を叩き込んだ時、勝ちを確信した。

だがそれは大きな間違いだった。

拳から激痛が走る。

そしてそれは拳のみにならず、そのまま腕へ、腕から体へそして全体へ流れ、焼けつくような痛みを刹那の時とは言え全身へともたらした。

視界がちかつく。

脳が一瞬にしてその動きを一時不能にされ、四肢は跳ね上がり体は意思もなく震え上がる。

その様が見えた人間には、私がまるで泳ぐことができず水中で足搔く昆虫のように見えただろう。

「ぐああ……つ!?」

バチリ、とドライバーが音を鳴らし、

《RESTART》

世界は私の承認も無しに緩やかに動き始めた。

シユヴァルツエア・レーゲンは一撃を受け吹き飛び何度も転がり、ようやく静止していたが、私の心境はそれどころではなかつた。

「何故、ポーズの中で攻撃をツ……！」

ポーズは世界を静止させる、まさに神のごとき所業の力。止まつた世界の中で動けるのはクロノスである私以外この世に存在しない、いや存在してはならない。さらにクロノスの鎧の前ではあらゆる攻撃はほぼ無力、この世界で私に痛みを与える攻撃など、ものはや核以外に存在しないというのに、何故私はダメージを受けた！

「ふつ……くつ、どうやら私の……目論み通りだつたようだな……」

「シユヴァルツエア・レーゲン、何をした……！」

銀髪を揺らし、彼女は上手くいったとばかりに不敵に笑みを浮かべている。許されない、この戦場において笑うことが出来るのは私一人のはずだ。

「貴様の戦いを見て、何度も不思議に思つたことがある……。それは私の慣性停止能・キンセラ・アクティブ・インーシャル力とも違う、いやそれすら越えた能力の正体もそうだが、それを解く上で疑問がいくつもあつた。そして今、その疑問は解かれた」

「……いいだろう、では聞かせてみせたまえ。君の推理とやらを」

まだ痛みが残る腕で先を促すと、シュヴァルツェア・レーゲンは壁に手をつきながら起き上がり、口を開いた。

「一つ目の疑問は、瞬間移動だ。貴様の試合を見たが、決定打となりえたであろう瞬間だけ、貴様も対戦相手も、位置がコンマ0.00000秒の世界で瞬間移動していた。

ISは音速を越えることができる、だからISもそれに耐えれるだけの耐久力を持っている。

だが、コンマ何零秒を越える速度を出せばソニックブームが起こり、さらに操縦者はGで原型を保てなくなるどころか蒸発し、何もかもが無事ではすまない。それがなかつたのが、まず大きな疑問だ

「……ふむ、続けたまえ」

「二つの目の疑問は、時計だ。この学園全体の電波時計が同時に何度も時間を修正して

いるとのデータが出ていた。

最新鋭の電波時計だ、ズレなど起こすはずもない。そうであるにも関わらず、どの時計も同時にそのズレを修正している。

そしてこの二つには共通点がある、それはこれらは貴様の試合中にしか起こらないという所だ。もっと具体的に言えば、貴様の腰についているその装置のボタンを押した瞬間にそれらが起こる」

「…………」

「私はこの二つに大まかな仮定をつけ、それに対する対策を持つて試合に望み、そしてそれが成功した今、貴様の能力は既に把握した」

「言つてみるといい」

「――貴様、時間停止を行つているな」

アリーナ全体の声が静まり返つた。ポーズを使つていないのでこういう状態になり、それを体験するというのは中々新鮮なものだ。

遠くの方で呆けていた白式が、はつとして声を上げる。

「時を止めるなんて、そんなこと出来るわけがない！」

「私は把握した、と言つたはずだ。そしてその弱点も。奴にダメージが入つたのがその証拠だ」

アリーナの電工掲示板を見ると、私のシールドエネルギーを示すゲージバーが目に見えて減っているのが誰から見ても丸わかりだつた。ここまで無傷だつたクロノスに、確かにダメージが入つたのだ。

ダメージを負う予定はあつた、そして能力が把握される予定も。だがここまで早く、ましてやシュヴァルツェア・レーゲンに暴かれてしまうとは。なるほど、どうやら彼女の言う通り、ラウラ・ボーデヴィッヒの価値は道化だけに収まらないらしい。

どうにもおかしく、思わず笑いだして拍手を送つた。

「……その通りだ、シュヴァルツェア・レーゲン。時間停止、それこそがクロノスの能力が一つである『ボーズ』の力だ」

「ふんっ、その分だと弱点も認めているようなものだな」

「徒手空拳しかない、そう言いたいのかね？」

「その通りだ。だから貴様は、私がボーズの瞬間に全身へ巡らせたプラズマに触れ、ダメージを受けた」

彼女は動きこそは派手ではあつたが、流石は軍人と言うべきか。シールドを受け身を取ることでシールドエネルギーの減少を最低限に抑えている。それもあつて、見た目ほどダメージは受けていないどころか逆に私のほうが大きいぐらいだ。

肉を断たせて骨を断つ、言葉通りの戦法だ。だが言うは易く行うは難し、この一手か

らは彼女の戦闘センスの高さが滲み出ている。

「例えどんな瞬間であろうとも、ハイパー・センサーがポーズの瞬間を見逃すわけがない。もう私にはその手は通用しない」

「なるほど。確かにクロノスの性能が君の言つた通りであるならば、その言葉はまさに真実となるだろう」

ではその理論がどれほど詭弁であるか、身を持つて知つてもらうとしよう。

『PAUSE』

ポーズを起動させ時間を静止させる。

その止めるまでの瞬間、シユヴァルツェア・レーゲンが何かしら構えたのが見えたことから、どうやら対策が出来るというのは本当らしい。今彼女の全身には、先程と同じようにプラズマが流れているはずだ。つまり今触れれば先程の二の舞、しかし私にはこの徒手空拳以外に攻撃方法はない。

そう、彼女の理論通りであるならば。

クロノスの弱点がある。それは対処が考えてみれば案外容易であるということ、そして相手に成長の機会を与えてしまうことだ。

この世界は弱肉強食、どれだけ有りであつても弱ければ絶滅されるだけ、安くして旨ければ尚のことだ。だが人類の手や天災が無ければ生物は絶滅することはない、どれだけ

動けなくとも、どれだけ隙があるうともだ。

例えば貝、あれだけ動きが鈍重であつてもあれらが自然に絶滅することはない。それはあれに貝殻という鉄壁の防御があつて、それを持つように進化したからだ。

つまり殻に籠るというのは弱気に見えるかもしれないが、初歩の状態ではこれ以上にないほど有効的であるということ。実際今まで抵抗もなしに喰らわれるだけの有象無象が、防ぐ手立てを身に付けるまでに進化をした。

押さえ付けるだけの力を振るうということは、それだけ有象無象に成長の機会を与えるということに他ならない。絶対無敵の力など存在しない、どこかしらに綻びがある。先程の私は見事に、その綻びをつかれたということだ。

故に、シュヴァルツエア・レーゲンは知ることになる。手負いの獣ほど恐ろしい物はなく、その前にした自身に勝つ術は無いのだということを。

バガルドライバーIIをバグスター・バツクルIIから取り外す。脱着音の後、取りだし握ったグリップにそれを取り付けることで、装着音と共にそれは呼称とその意義の形を変える。

ガシャコンバグヴァイザーII、それは切り裂く武器であり撃ち抜く兵器の名前。

「己の無力を、そして抗うことの無意味さを――」

Bを押し、キメ技の音声の後直ぐ様Aボタンをクリックする。

『CRITICAL JUDGEMENT』

二本の砲門が碧の雷を迸らせながらもエネルギーを充填していく。これから放たれるのはキメ技である蹴りとは格が違う、あれはどちらかというとシールドエネルギーを削ることよりもその装着者である人間を一発K.O.することに趣を置いている。だがこの一撃は違う。

「——その身で味わえ」

グリップを握りしめる。踏み締めた地面が碎けるほどの反動を出して、MAXエネルギーが砲門から放たれる。それはまるで長針のように鋭く形取り、空を裂き真っ直ぐにシユヴァルツエア・レーゲン、その中心を寸分狂いなく貫いた。

《終焉の一撃！》

一撃を受けた彼女の体は動かない、時を止めた瞬間となんら変わりなくそこにある。だが既に勝敗は決している。

ガシャコンバグヴァイザーIIをバグスター・バツクルIIへと再びセットし、操作する。

《RESTART》

時間が再び動き出す。それと同時に彼女が、いやシユヴァルツエア・レーゲンが膝をつく。彼女は自分が何故そうなっているのか全く理解できていない、そんな顔で呆けていた。

「な、んだ……なにをされた……？　……一体、何をしたツ！」

「ふつ、ハハハハツ！」

「答えろ檀正宗ツ！」

試合開始時と変わらぬまま、プラズマ手刀を持つて狂犬のように噛みつこうとしたいたのだろうが、そんなことはもう出来はしない。動こうとしても無駄なことだ、それはもう君の言うことを聞きはしない。何故ならそのISは既に、誰のものでもなくなつたのだから。

「リプログラミングさ」

「リプロ、グラミング？」

「そうとも」

私はおかしくも現世での記憶を二つ持つて生まれ育った奇妙な存在だ。それには様々なゲームの存在、野望、そして恐怖する存在など様々なものが記憶されてあつた。その中の一つが、このリプログラミングだ。

本来はチート等を使用した不正利用者に對して二度とゲームが出来ないようアカウントやゲームデータに使うことを想定した力なのだが、既にこの力はISにも対応するようになりプログラミングしクロノスに設定済みだ。

「リプログラミングとは文字通り、初期化を意味する言葉。そしてクロノスにはその力

が備わっている。君のシユヴァルツエア・レーゲン、そのISコアを初期化する能力がね」

その言葉と共に、処理が終わったのかシユヴァルツエア・レーゲンの形が変わっていく。トゲトゲしさは消えていき、鮮やかさは失われていき、そしてその力の全てが更地になっていく。彼女が積み上げてきたものは全て、塵に帰るのだ。

「君はもはや絶版だ」

「檀、正宗エツ！」

PICすらまともに働いていない機体では動くことも儘ならないのだろう、機体は擦れる音を出すだけで何も反応はしない。かといって一人では抜け出すことも出来ない、何故ならプログラミングの内容がもはや赤子も同然、当たり前のようにある機能でさえ学習された物なのだから、何も動かなくて当然だ。そのコアはなんの動かし方も知らないのだから。

思い知つただろう、それが君の力の果て、君自身の限界だ。

だがなにも残念に思うことはない、そのスペックは私たちに有用に使われると、そう決まつているのだから。

「」

『……シユヴァルツエア・レーゲン、戦闘続行不可能と見なし棄権とします。すぐに入

タツフが回収に向かいます、ボーデヴィッツヒさんは待機しておいてください』

その言葉の後、すぐに教師であろう I S 二機がアリーナに降り立ち、初期化されたシュヴァルツエア・レーゲンそのままラウラ・ボーデヴィッツヒと両側で担ごうと撤退の準備を始める。

動くことも出来ない無様な姿のまま、彼女は小さく何事かを呟いている。聞き取ろうかと考えたが、止めておいた。負け犬の遠吠えほど耳汚しもなく、また情けないこともないだろうと思つたからだ。

「……さて」

出口へと足を一步進める。おおよその目的は果たした、もはやこの場で無駄な時間を割く必要もない。それよりもするべきことは山ほどある、それに向けた入念な準備こそが、今もつともゲンム・コー・ポレーションが必要としていることだ。

「——ツ！」

「……ふん」

背後から迫り来る一刀を半身を傾くことで避け、二の太刀を脚で蹴り上げ弾く。

互いに距離を取った所でバグルドライバー II をガシャコンバグヴァイザー II として装備し、瞬時加速により勢い付いた一閃をチエーンソーの刃で受け止める。衝撃が風圧となつて塵を巻き上げる。

相手も両手を持つて一太刀を押し通そうとしたため、それは自然に鍔迫り合いとなつた。

「そういえば、気になつていたことが一つあるのだが……君は何故そんなにも私を敵視する？ ゲンム・コーポレーションはなにもかもホワイトであることが自慢の一つなんだがね」

「白を切つても無駄だ！ お前がオルコットさんにしたことは、全部分かつてる！ オルコットさんが送つてきた手紙から！」

「——セシリア・オルコットの手紙、だと？」

なんだそれは、私はそんなものを知らない。手紙を出した事実など、報告に上がつていない。

どうやら、由々しき事態にあるらしい。ゲンム・コーポレーションの内情を知られたとなれば、世界に隙を見せることになる。たかが一人の青二才に見られたところでダメージにはならない、だがそれが世論を味方に回したとなれば……。

「……すまないが予定が入つた。君に構う時間はもう無い！」

つばぜり合いのまま、Aを押し素早くBをクリックする。

『CRITICAL SACRIFICE』

チーノソーソの刃がエネルギーの充填に合わせて回転数を増す。

モーターが回転する低い音が大きくなるにつれ、ギリギリと得物から散らされる火花の量は多くなつていく。その光景に予感が働いたのか、白式は最悪を避けるように後ろに下がる。が、もう遅い。既にエネルギーの充填は終わつている。

「お仕置きだ！」

円状の物に刃がつけられた、エネルギーのカッターがガシヤコンバグヴァイザーⅡから放たれ、高速回転をしながら白式へ襲いかかる。

「そんなエネルギー！」

雪片式型に名の通り透き通るような光が宿る、まるで物語で主人公が振るうような聖剣そのもののような輝きを放つそれは高圧縮エネルギーのカッターをなんの抵抗もなく断つ。

あれが零落白夜、エネルギーそのものを無効化にする唯一仕様^(ワンオフアビリティ)。聞いていた通りエネルギー相手には凄まじい切れ味だ、絶対防御を強制的に発動させるあれをクロノスでも受けてしまえば一発で試合終了だ。

だがもう遅いのだ。

『CRITICAL CREWS—AID』

「——ツ!？」

「あああツ！」

エネルギーに集中していたのが彼に仇となつた、その後ろで既にクロノスは別のエネルギーの充填を終えていた。だからこうして白式、君の顛黽に私の必殺の一撃が突き刺さる。

肉に衝撃を与えた感触が足を通じて登つてくると同時に、鈍い音が鳴る。白式はかくも銃弾の如しスピードで壁に叩きつけられ、機械的なその壁を碎いた爆音を鳴らしその運動は止まつた。

その姿にどこか見覚えを感じたが、そんなことはもうどうでもよかつた。今は文字通り、一分一秒が惜しいのだから。

何かしら周りが騒がしく感じられたが、もはやそんなものは私の耳には入つてこなかつた。すぐに幹部全員で会議する必要がある。この失態を誰が起こしたのか、問題の所在を確かめるための会議を。

ラウラ・ボーデヴィッツヒの消失

ラウラ・ボーデヴィッツヒの行方がわからなくなつた。

三人の試合が終わつた後、その知らせを聞いてすぐに動いた。あの様な負け方が、ア
イツにとつてもつともダメージが大きい。

一人になれば何かしら動くことはよく分かつていて、昔から何かを抱えるとそこでは
ない何処かに足を運んで一人で考え込むような、そんな人間だ。分かつていたのに、私
にはどうすることもできなかつた。

”ラウラ・ボーデヴィッツヒの行方がわからなくなつた”、その言葉の意味を真に理解
できていなかつたのだろう。

どこにもいなかつた、保健室はもちろんどの教室にもどのアリーナにも、そしてどこ
のピットにも。どこを探してもなにを使つても発見できず、ボーデヴィッツヒはIS学園
から忽然と姿を消していった。

じやあどこに行つたのか、IS学園から誰かが出たような形跡は無かつたというの
に。

いや、一つだけ心当たりがあった。なんの痕跡も残さず、一切の遠慮も予兆も見せずに人を振り回すような、そんな人物に。すぐに携帯を手に取り連絡を試みた。いつもは向こうからかかってきてうるさいぐらいだというのに、こんなときには限つて中々出ない。

数コールの後に繋がった音と共に、いつもの浮わついた声が耳に届く――
『ちーちゃん、今忙しいんだけど』

――だがそれはならなかつた。いつものふわふわとした態度は鳴りを潜め、その声には怒りが滲んでいる。

あの何に対しても余裕綽々と斜めに構えているこいつがこんな状態になつてているのは、ISの論文を否定された時以来ではないだろうか。

だが気にしてはいられない、時間がないな割いてもらう時間を少しでも増やせるように本題から入るべきだろう。

「ラウラ・ボーデヴィッヒがいない、覗いていたのなら分かるだろう。頼む、教えてくれ」
『いないよ、もう』

その断定は速かつた。

「……何?」

『ラウラ・ボーデヴィッヒなんて存在はもう何処にもいないんだよ、ちーちゃん』

「何を言つてゐる……？　お前は何を知つてゐるツ？」

何處にもいないなんて言われて、そう簡単に領けるものか。自殺なんて出来る場所は限られている、するには凶器やら場所やらを用意する必要がある。だがその痕跡すらこの学園にはない、ラウラ・ボーディヴィッヒは何にも触れていないしそんなところに行つてない。

なのに何故そう言いきれる、何故いなことを知つてゐる。

『ちーちゃんさ、アイツのことどう思つてる？』

「話を逸らすな！　今はラウラのことだ！」

『逸らしてなんかないよ、重要な話さ。ちーちゃんは、檀正宗のことどう思つてゐるの？』

「檀、だと？」

何故そこで檀の名が出る。確かに奴は対戦者としてラウラと戦い、アイツには實にそぐわない敗北を与えた張本人ではあるが、それだけだ。どうしてそこでただの生徒の名前が出てくる、檀と今回の事と何の関係がある。

「檀はただの生徒だ。今の事と何の関係も、」

そこで、どこか飲み込めない何かに直面した。

なんだ、この凝りは。一見して何もおかしいことはない、普通のことを私は喋つてゐる。だというのに、これは、この違和感はなんだ？　私は何を感じてゐる、何を疑つて

いる？

『そこだよ』

「なんだと？」

『ち一ちゃんは今、ごく自然にそれを行つた。だから気づけるけど、掴みきれない』

『何の話だッ！』

『——どうしてち一ちゃんは、そんなに檀正宗を信用できるの？』

『どうして、つて』

私はそれに答えられなかつた、檀正宗は一見してまともな生徒だ。授業態度も悪くない、社長なだけあつて成績も良い、最初に壁こそあつたが今はクラスメイトとも自然に付き合えている。教師から見て、そう悪い生徒に思えない。

何故だ？

確かに平時の態度に問題はなくとも、戦闘時でのそれは褒められた物ではない。リスクもなく、バトルとして付き合はず、まるで殺し合いをするかのように非道に動く。言動もまた一人の社会人として言葉遣いというものを叩き込まなくてはならないほどに酷い。

だといふのになんだ、このアイツに対する高い信頼感は。

『それね、東さんも持つてるんだよ』

「なんだと？」

『檀正宗という存在に対する高い信頼……好感度と言い換えてもいいかもね。私にも心の中にそれがある』

好感度、私と束の中に何故か高い数値で設定されているそれ。その凝りが違和感を覚えさせているのか、確かにそれが心の中にあるというのであれば未だにある”檀正宗は犯人ではない”と信じる気持ちにある程度噛み合うかもしれない。

つまり私は、洗脳の類いでも受けたなどと考えるのは無駄だ、檀は時を止めることが出来る。つまり何時だつて事に及ぶことは可能だ、そしてそれは証拠が出ないことを意味する。

しかし他の教師は檀にいい感情を持ち合わせてはいなかつた、ということは私の発言力が目当てか、はたまた別の理由か。

そう、こちらが受けた理由など幾らでも説明がつく。だが、束はどうして好感度が高いんだ？ アイツはそうそう気にくわない相手の前に出るような人間ではないと思つていたのだが。

『誓つて言うけど、束さんは檀正宗と会つたことすらないよ。向こうが忍び込んだことも、束さんが忍び込んだこともない』

「つまり、洗脳は電波のようなもので送られているのか？」

『洗脳じやないだろうね、洗脳なら『アリス』がシャツトダウンするはずだよ。オンラインでなら確実にね』

「どういうことなんだ……？」

『分からぬからそれを調べてるんだよ、だから忙しいの』

そう言つて勢いのまま電話を切ろうとするので慌てて止めようとするが、束は本当に時間を割く余裕がないのだろう。最後に一言だけ残して通話を切つた。

『ラウラ・ボーデヴィイッヒは何処にもいないよ、いるのはもう皮だけさ』

三日がたつた今でも、あれ以降束が通話に出ることも、かけてくることもなかつた。

ラウラ・ボーデヴィイッヒはまだ見つかっていない、ドイツは報告されても然程気にもしない様子で生返事のような返答を返してくるばかりで搜索の姿勢を見せようともしない。

シユヴアルツエ・ハーゼの隊員も、今この時ばかりは涙を見せて悔しがつていた。僅かながら交遊もあつた生徒たちも不安げな表情を見せている。これ以上そんな姿をただ黙つて見てはいる訳にはいかない、少ないばかりの伝だが何を使つてでも見つけなくてはならない。

そう思つていた矢先のことだつた、ラウラ・ボーデヴィイッヒがゲンム・コーポレーションの社員として帰ってきたのは。



よく考えれば、すぐに分かつたことだつた。

セシリア・オルコットからの手紙を、織斑一夏が受け取つた。正確な時間は不明だが、動く気力すら与えられない現在の彼女の状況から見て、手紙を出せるタイミングは一度しかない。

護送車の中だ、あれだけのスペースがあれば手紙を書くことも、それを第三者が見ることも、その人物に手紙を託すことも出来る。

だがそれをするためには、第三者が我が警備部隊を突破する必要がある。だが警備部隊は全くの無傷、であれば残る可能性は賄賂か、グルかだ。だが賄賂に靡くような安月給を、このゲンム・コーポレーションは払つていらない。

なら残つた可能性など一つしかない。

「あの警備部隊の管轄はCSOの物だつた……だがCSOの許可なく通ることが出来る人物が一人いる。それが君だ、CIO」

「流石の『慧眼、そして『明察。感服致しました』」

CIOはそのスカートをつまみ丁寧なお辞儀をするだけで、焦る様子も言い訳をするようなこともしない。私はこれまで多くの人間を見てきた、自分の目には経験と実績に

よる自信がある。

だがその目を持つてしても彼女の内心を探ることも、何を抱えているのかも見抜くことができない。

恐ろしい女だ、だがだからこそC I Oに抜擢した。間違いではなかつた、しかし正解ではなかつたようだ。

「我が社では徹底させていることがある、どんな新入社員でも派遣社員であろうと、必ず守らせるようにしていることだ。C I O、答えてみたまえ」

「はい。報告、連絡、相談。所謂、ほうれんそうといふものですね」「その通りだ。よく分かっているようだ、だが――」

白く細い首を掴む。緑の手甲が鈍く輝いた。

「骨身に染みてはいなかつたようだな?」

左手に装着されたガシヤコンバグヴァイザーハ、その武装であるチエーンソーが唸る。

会社において独断行動とは最も忌むべきものであり、即ちそれを許すことは群体全ての死を意味することとなる。

ネットワークが発達しているこんな世の中だ、何が倒産に繋がるか分かつたものではない。あの世界第三位の会社ですら派遣社員の独断、それによるネットワークへの個人

情報の漏洩が倒産に繋がつた。

恐ろしいのはミスではない、ミスは取り返すことが出来る。本当に恐ろしいのは失敗を失敗と知らず、そう思わない行動をする人間だ。そしてそれは、私の目の前にいるふむ、だが。目の前にいる彼女の目の、なんと慈愛に満ちていることか。

「……汗をかかないな」

変身を解除し、彼女から離れる。

「いいだろう、君に一つチャンスをやろう」

指をパチリと鳴らし合図を送るとドアが開けられ、その先からは黒の白衣を纏つたCKOが笑顔で入室した。

その手に色鮮やかなメカとガシヤットを携えて。

「はろはろー☆」

「CKO、彼女にそれを取り付けたまえ」

「合点承知の助♪ 報酬の分もきつちり働く私は良妻の鑑♪ つと」

CKOはすぐに行動を始め、元々一手間で済むことであるが瞬く間にCIOに持つてきたそれを取り付けた。ここまで特に抵抗をする様子も見せなかつたCIOがここで何故か苦言を漏らす。

「良妻であれば無償で動くものだと存じ上げますが」

「うるせえな黙つてろよ、社訓も守れない愚図が」

「失礼いたしました、ビジネス”ライク”様」

……社員同士仲良くしろ等と、私は言うつもりはないが微々たる仲間意識ぐらいは持つ方が効率的だと思うのだが。腕を信用するぐらいでないと仕事に支障が出てしまうものだ。

CIOがしたことは信頼関係を潰せるような物であつたからそういう態度に出るのは仕方がないとはいへ、何か別のことでの争つてているような気も。……いや止そう、女性のことで口を突つ込む気にはなれない。痛い目を見たばかりであるから尚更だつた。

「その商品名は『ゲーマードライバー』。試作品だが、得られるパワーはクロノスの六分の一……つまり第二世代IS一機に相当する。もちろん装着条件に性別はない」

「改修したり開発したのは私やCTOだけど、原案はまーくんのそれだから安心してもいいよ

——死なないかは別だけどね」

その一言で部屋に張り付くような緊張感が生まれた。部屋に満たされた緊張を、CIOは今一身に受けているはずだ。しかしそのお手本通りの姿勢に乱れは一切生まれていない。

そうだCIO、そうでなくては君をその立場に就任させた意味がない。その胆の太さ

こそが、君がC.I.O.たる所以なのだから。

「今からそのゲームドライバーに、そのガシャットを挿入してもらう。君が選ばれた暁には、私は君を自慢の一兵として扱い、今回のこととは不問とする。だがそうでなければ……その命を持つて代価とする」

「……」

「だが安心したまえ。既にチケットは渡してある……それを君が正しく受け取れているのか。それが君に与えられたチャンスだ」

選ばれなければ死ぬ、そんな状況にも関わらずやはりC.I.O.は汗をかかない。それどころか恭しく頭を下げ始め、余裕を含ませ口調で喋つた。

「承りました。では、一言よろしいでしようか?」

「言つてみたまえ」

遺言か、それとも謝罪か。

その二つであれば、私は彼女の遺体をそちらのゴミ捨て場にでも放っていたことだろう。

だが、彼女は私の期待を裏切らなかつた。
「自慢の一兵の誕生です、ご主人様」

挿入音が鳴り響く。

数瞬後、私は震えた。それは笑いのものでも、怒りのものでも、悲しみのものでもない。

——歓喜のそれだ。

「素晴らしい」

目の前に立っていたのは己の血反吐で身を汚した敗者ではなく、鈍く輝く装甲を身に纏つた一人のライダー、私の自慢の一兵の姿だった。

『——I, M A K A M E N R I D E R』

「今回のことば不問とする。これからもゲンム・コーポレーションのために尽力してくれたまえ、C I O。いや、

——チエルシー・ブランケット。仮面ライダー、風魔』

一人のメイドは、恐ろしき力を持つた。しかしその力をここで振るうことをせず、ただその場で頭を垂れて身を捧ぐ。

『Y e s , M y L o r d』

その言葉を皮切りに、彼女はその姿を消した。今回のこともあるつて、色々と報告すべき場所へと向かつたのだろう。最後まで見逃していたC K Oは不満げに口を尖らして、こう聞いてきた。

「聞き出さなくつてよかつたの？」

「必要ない。凡そ察しはつく……無駄飯食らいが増えるわけでもない、好きにさせておくといい」

社長がいいならそれでいいけど、と漏らしながらもやはりまだ不満げのようだつた。確かにあれは会社のためにはなるが私のためにはならない、彼女からすれば排除するのがやはり一番手つ取り早く楽なのだろう。しかし社長の代わりなどいくらでもいる。

「ご苦労だつたなCKO、報酬は後程送るとしよう」

「あつ、その報酬、ここで使うね。というわけでたまには名前で呼んでほしいなあつて！」

「……君は報酬が目的で我が社にいるのだろう、それでいいのか？」

そう苦言を呈したところで、CKOの喜色一面の表情は鳴りを潜めない。まるでプレゼントを楽しみに待つてゐる子供のようなその顔に、それ以上強く言うことも出来なかつた。社長としてこれでいいのだろうか、いや社員が望んでいるのだからそれが一番なのかも知れない。

「これからも我が社のため、そして私のためにその力を存分に振るつてくれ。」リーゲ

”

「につひひ。頑張るよ、まーくんつ☆」

頭部に装着された機械的なそれを揺らして、フローレンはピースサインを突き出し

た。
。

主人公、織斑一夏の転機

また、負けた。なんの文句も浮かばないほど、綺麗に叩きのめされた。もはや一分の隙もない完璧な敗北、それは自らの力の無さを露呈させ、自分の心を深く深く沈めていく。

俺では勝てないのか。檀正宗に、クロノスに、ゲンム・コーポレーションに。檀正宗の戦闘センスは本物だ、しかもクロノスにはポーズという強力な力があつて、それを率いるゲンム・コーポレーションは世界を牛耳る企業となりつつある。

どうすれば勝てるのか、どこを攻めれば俺は野望を阻止できるのか。分からぬことは目の前の視界を黒く染め上げ、進むべき道を淡々と塗りつぶしていく。

いや、そうじゃない。

どうすればとか、なにをすれば、じやない。これはゲームではなく、用意された攻略法なんて存在しない。道は自分で作るしかない、塗りつぶされた道を自分の色で染め上げて、己の道としなくてはならないんだ。

弱音なんて吐いてられない、少しでも前に進まなくちやならないんだ。

そもそもしなければ、俺は……。

「……一夏？」

「つ。な、なんだ鈴？」

少し、深く考えすぎてたかもしれない。こちらを覗きこむ鈴の表情は、どこか心配しているように見えた。

「なんだ、じやないわよ。そつちが急に黙りこんだんじやない。……前の一戦のこと、まだ気にしてるの？」

「そんなんじやないって。皆それぞれ協力してくれてるんだ、落ち込んでる暇なんかないしな」

クラスの半数は檀正宗に味方している。それはアイツが持つ類い稀なる才能である、カリスマってやつを存分に發揮しているからだろう。現に、何人かはゲンム・コードーションでもう働き始めてるって聞いたこともある。

価値があればどんな人物であろうと別け隔てなく採用し、さらにカリスマの力でどんな問題児であろうとも統率し一流の社会人に育て上げる。ここだけ見れば、檀正宗は社長として理想的であるように見える。

けど逆に言えばそれは、価値のない人間に対しては容赦なく在るつてこと。あいつの前に出た価値のない人間がどうなったのか、それはオルコットさんと前の大会で檀正宗に敗れた二人がそれを証明している。

ボーデヴィッヒさんもその一人だつた、そして俺もまた敗れた一人。どうしてか俺たちは生かされている、いやボーデヴィッヒさんはもう生きてはいないのかかもしれない。男子三日会わざしてなんとか、そんな感じ諺があるけど、あれはそんなものじやなかつた。憎悪をぶつけられた俺だから分かる、あれは外面の名前がボーデヴィッヒであるだけで中身はまるで別物だ。

まるで、感情データをまるごとフォーマットしたかのような……これもアイツの言つていたリプログラミングの効果なんだろうか。今の俺には何も分からぬ、ただ分かることがあるとすればこれも全部檀正宗がしでかしたことつてぐらいだ。

閑話休題。

でも、クラスのもう半数は俺を味方してくれている。皆でクロノスの対処法や弱点なんかを調べあげてくれていて、その中には上級生なんかも含まれている。本当に有り難いことだと思う、皆俺がクロノスを倒せると信じて動いてくれているんだから。

だから、増え弱音なんて吐いてられない。廊下を進む足取りにきちんと力を入れる。「だつたら、辛氣くさい顔してるんじやないわよ。確かに今のところお先真つ暗だけど、折れる理由になんてならないわ。暗いこと考えてる暇があつたら、私から一本でも多く取つてみなさい！」

「……鈴つて、発破かけるの下手だよなあ」

「んなつ!? 人が折角心配してやつたのに……!」

「心配してくれたのか?」

「くくくつ! 知らない!」

怒つてしまつたからだろうか、鈴は顔を赤くしてそっぽを向いてしまつた。発破が下手だ、なんて言つてしまつたけど鈴はすごい。ほんの少しの言葉で、こんなにも俺の気を楽にしてくれる。

鈴の言う通りだ、現状が辛くたつて折れる理由になんてならない。結局は自分にどう打ち勝つのか、それが一番の問題だ。

ああ、頑張らないといけないよな。本当に。

「でも、それじゃあ彼に勝つことはできない」

振り向くと、知らぬ女性が壁に体を預けて立つていた。その髪は世にも珍しい水色で、手には今持つのは珍しい扇子、制服の学年カラーは二年生のものを示している。しかも、とびきりの美人だ。

鈴は近くに来ると耳元まで顔を近づけてきた。

「……誰?」

「……いや、俺も知らない」

「本当でしようね? あなたの女の知り合いが出来る速さが異常なのは知つてるのよ、

それこそ足りてるぐらいには」

「速さが足りてるつてなんだよ。じゃなくて、本当に知らないって」

確かに話しかけてきたのは向こうだけど、だからって知り合いとは限らないだろ。俺を集客装置かなにかと勘違いしてるんじやないか？

それに、友達が増えるのは良いことだろ。

「安心して。少なくとも私は味方のつもりだし、どちらかと言えば君の方が好みね」「はあ……？」

「がるるるつ！」

ああ、さつきまで警戒止まりだつた鈴が急に敵意を剥き出しに。というか犬かお前は。

犬耳……尻尾……はつ、いやいや変なこと考えてる場合じやない。

「一夏っ！　こいつは敵よ！　絶対向こうのスパイとかそんな感じよ！」

「んー、まあそう呼べれるのも仕方ないとは思うのだけど……かといってスパイでないことの証明も難しいし」

向こう、つまり檀正宗の側の人間であると言うことを示す言葉。今の学園の状況を考えたらそう思うのも仕方ないかもしけないけど、俺はそれに疑問を抱いた。

「いや、きっとこの人はスパイじゃないよ」

「ふうん？ 参考までに、どうしてそう思つたのかを聞いてもいい？」

手に持つた扇子を広げて、『訣明余地』の字を見せてくる。それ、もしかしてずっと用意してたのか……？ ああいやいや、今はそうじゃない。

「単純に、最初にかける言葉としては間違つてるなーと思つたから、かな。じゃなくて、です」

「そう思わせる手口なのかもしれないわよ？」

「それだつたら、素直にすごいなつて思います」

彼女の目が細くなる。なんだか力強く睨まれてるような、何かを見定められているような……少なくとも居心地がいいようには感じられない。

そうしていると鈴が俺の前に立つて、庇うように片腕を横に広げる。俺には感じられないのだが、そんな剣呑な雰囲気なのだろうか。なんだか場に取り残されているような……。

しばらくすると女性は笑みを溢して、扇子を閉じた。そうしてまた扇子を開いて、『サプライズ！』の字を見せてくる……つて、なんだそれ！ あの一瞬で文字が変わつたぞ！？

「ごめんなさい、ちょっとからかいすぎたみたいね」

「え、えっと……」

「信じられないほど真っ直ぐね、こっちが馬鹿らしくなつちやうぐらい」

「それ、褒めてる?」

「もちろん、手放しで称賛します」

朗らかな笑みを浮かばせる彼女には、先程までの冷たさは感じられなかつた。鈴も場の空気がわかつたのか、さつきまでの敵意を潜ませてゐる。

「自己紹介が遅れたわね。私は更識楯無。気軽に楯無お姉ちゃんと呼んでちようだい」「けつ、何がお姉ちゃんよ。でかいだけのくせに」

「ん~? お子様にはこれが羨ましくてたまらないのかな~?」

そう言うと更識さんは胸を手で上げて”ゆさつ、ゆさつ”と揺らしてゐる。

……すごい。あの大きさ、柔らかさ、そして形の良さ。どれを取つても筈に全く劣つてはない。まさに二強だ、おっぱいだけに。

山田先生はプレミアム殿堂入りだからランクに入つていない。

「シツ!!」

「い、つつ!?

鋭いローキックが、俺の泣き所を襲う! 鈍重な音が中にも響き、同時に絶叫したくな

なるほどの痛みが体中を駆け抜ける。こんなのが弁慶でなくとも泣ける。

「随分と仲が良いのね?」

「今現在の状況が見えてないんですか……っ!?」

「それを踏まえた上での感想よ」

更識さんは扇子で口元を隠し上品に笑う。すごい、なんて高級感溢れる仕草なんだ。鈴なんて腹を抱えて仰け反って馬鹿笑いするのに。男子かよ。

「……」

「待て、待つて鈴っ！ 頭部に回し蹴りは俺じやなくとも死ぬ！」

良くて昏倒する。どちらにしろ、保健室行きは免れない。

「あっ、自己紹介の途中でしたよね!? 俺は……」

「織斑一夏くんと、凰 鈴音さん、よね。……お約束通りの驚いた顔ありがとう織斑くん。一度受ける立場になつてみたかったのよね」

「一夏、あんたも私もクラス代表なんだから、知られてて当然でしょ」

そ、そうだつた。それに俺はこれでもISを動かせる男子の一人だ。世間を大いに賑わせたこともある、そこそこな有名人だつた。政権交代なんかもあって一瞬で収まつたけど。

「それもあるけど、私の立場もあるからね」

「つまり……？」

「ごめんなさい、実はあれで自己紹介は終わつてないの。私は更識楯無、このIS学園で

は生徒会会長をしていて、最強の名を欲しいがままにしている者よ。ねえ一夏君——
その手の扇子が今一度広げられ、そこには『新規歓迎』の四文字
「——生徒会で、私と特訓してみない？」もちろん、打倒檀正宗くんを目指して、ね
更識さんはそう、妖しく笑つた。